

2018 年度博士論文

高齢者の意識的及び無意識的自己像と
成育歴との関連
—交流分析理論の脚本分析を中心に—

桜美林大学大学院

中村 延江

高齢者の意識的及び無意識的自己像と成育歴との関連

—交流分析理論の脚本分析を中心に—

目次

第1章 序論	・・・ 1
1. 高齢社会における高齢者の現状	・・・ 1
2. 主観的幸福感（満足感・健康感）と自己像	・・・ 2
1) 主観的健康感	・・・ 2
2) 意識された自己像と無意識の自己像	・・・ 2
3) 自己像の形成と成立の要因	・・・ 3
3. 質的研究～脚本分析の採用	・・・ 3
 第2章 研究の意義と目的	・・・ 4
1. 研究の意義	・・・ 4
2. 研究の目的	・・・ 5
3. 研究デザイン	・・・ 5
 第3章 研究	・・・ 7
1. 研究Ⅰ 主観的幸福感とバウムテスト（樹木画テスト）の指標との関連	・・・ 7
1) はじめに	・・・ 7
2) 研究の目的	・・・ 7
3) 対象と方法	・・・ 7
4) 結果	・・・ 9
5) 考察	・・・ 10

6) まとめと課題	・ ・ ・ 13
2. 研究Ⅱ 高齢者の無意識の自己像及び主観的幸福感と成育歴との関連 ～交流分析理論における脚本分析を用いた質的研究	・ ・ ・ 16
1) はじめに	・ ・ ・ 16
2) 研究の目的	・ ・ ・ 16
3) 対象と方法	・ ・ ・ 16
対象	
方法	
(1) 交流分析について	・ ・ ・ 16
(2) 脚本について	・ ・ ・ 17
(3) 脚本分析	・ ・ ・ 19
(4) インタビューガイド	・ ・ ・ 20
4) 結果の検討方法	・ ・ ・ 21
5) 事例の選定について	・ ・ ・ 22
6) 各事例の検討	・ ・ ・ 22
事例	
事例 1	・ ・ ・ 23
事例 2	・ ・ ・ 27
事例 3	・ ・ ・ 34
事例 4	・ ・ ・ 39
事例 5	・ ・ ・ 43
事例 6	・ ・ ・ 47
事例 7	・ ・ ・ 51
事例 8	・ ・ ・ 55
事例 9	・ ・ ・ 59
7) 結果	・ ・ ・ 64
8) まとめ	・ ・ ・ 66
9) 考察	・ ・ ・ 67

第4章 総合考察	・ ・ ・ 70
自覚的自己像としての主観的幸福感について	・ ・ ・ 70
感情尺度について	・ ・ ・ 72
成育歴との関連について	・ ・ ・ 73
9 事例にみられた元気な要因について	・ ・ ・ 74
質的研究法としての脚本分析について	・ ・ ・ 75
研究結果の利用と今後の課題	・ ・ ・ 76

インタビューガイド

文献

謝辞

高齢者の意識的及び無意識的自己像と成育歴との関連

一交流分析理論の脚本分析を中心にー

第1章 序論

1. 高齢社会における高齢者の現状

現代は高齢社会であるが、わが国では 2007 年に高齢者率が 21%を超え超高齢社会を迎えた。その後高齢者率は増加し、2016 年 9 月の総務省の報告では、27.3%となり、過去最高を更新している。男性は人口の 24.3%であるが、女性は 30.1%となり、高齢者の女性は人口の 3 割を超えたことになる。

エリクソンのライフサイクル論では、高齢者のライフステージは老年期と称され、発達課題は「統合・円熟対絶望」とされているが、それまでの様々な経験を統合して自分の生き方を受け入れ、納得して円熟に至ることができなかつたり、中年期後期以降からの様々な喪失体験（例えば、若さや体力、仕事、経済力、社会的地位の喪失に加え身近な人との別れ等）を乗り越え、それを受け入れることができず、うつ状態や不安感を呈して精神的に安定した老年期を送ることができない高齢者も少なくないと思われる。平成 23 年の政府の患者調査による統計で、うつと判断された患者は 60 代で男性 52 千人、女性 99 千人、70 代では男性 45 千人、女性 93 千人、80 代で男性 13 千人、女性 56 千人となっている。ライフストーリーやライフコース研究の視点から言えば、全体的なライフステージではなく個人の生きてきた道筋に焦点を当てるので発達課題は人それぞれの時期に個別のものとされるが、生物学的視点からみればやはり老年期は老いるという事実直面せざるを得ず自分の人生を振り返りどのように統合するかが課題となると考えられ、それを乗り越えることが困難な高齢者も少なくないと考えられる。

一方、最近では、元気な高齢者も多く、高齢者を 65 歳からとするのは実情に合わないとの意見もある。わが国の高齢者の就業率は 2016 年時点で世界主要 7 か国と比較しても高く 21.7%と報告されている（平成 28 年版 高齢社会白書 内閣府）。65 歳以上の高齢者で、まだ仕事を持って働いている人や就業はしていないが何らかの形で社会活動をしている人、地域活動をしている人、ボランティアをしている人、あるいは趣味、習い事をしているなど、社会活動に参加し生き生きとした生活を送っている適応的な自立高齢者も多い。

無論、身体的疾患や不調、怪我、経済的状況、家族構成や家族関係などが老年期の生活状況に影響することは充分考えられる。しかし、様々な問題がクリアでき

ていて、特に心身に大きな問題もなく、認知症も発症していないにも拘わらず、家に閉じこもって消極的な生活を送っている高齢者も少なくない。立場や状況から家の中での生活が多く、外と関わらなくても自分なりの価値観を持って現在の生活に満足して生き活きと暮らしている場合もあるだろうが、さまざまな要因からメンタルヘルスがうまく保てずQOL（quality of Life, 生活の質）が低く、消極的になっていて、不適応感や不満足感を抱えていて社会参加できない場合も多いようである。満足度を調査した厚労省委託研究(平成25年)では、60～69歳の女性で56%、70～79歳の女性で41%が不満足感を抱えていると報告されている。

以上のように、様々な問題がクリアできていても生き活きした生活が実現できず消極的で閉じこもりがちな群と上記の課題を抱えていても精神的に自立して生き活きと日常生活を送り積極的に社会参加している群の違いはどのような要因によるのであろうか。

うつ状態や消極的生活状況などの問題をもった高齢者の状態を把握することも重要であるが、高齢者メンタルヘルス向上のためのサポートに活かすために、日常的に生き活きと社会参加している自立高齢者の心理的要因を把握することも重要であると考ええる。

2. 主観的幸福感（満足感・健康感）と自己像

1) 主観的健康感

心身の健康については自己評価が重要とされている。健康感を調査した戸ヶ崎らの研究では、オプティミスティックな自己評価を持っていると免疫機能が高まり実際に健康度が高くなるとされている（戸ヶ崎ら 1993）。心の健康を示す一つの指標として生活満足度と主観的幸福感が言われているが、これに与える要因では自覚的健康感が最も大きいとされている（佐藤ら 1994）。自己評価はその個人の自己像の在り方であると考えられることから心の健康を保つためには自己像の在り方が重要であると考ええる。

2) 意識された自己像と無意識の自己像

自己像は自分に対するイメージであり、自己評価であるが、自分で意識している自分の在り方や自覚的自己評価と、はっきりと意識していない前意識的あるいは無意識の自己像とがある。その両者が一致している場合もあるが全く乖離している場合もあると想定される。その両者の関連と相反している場合の適

応感はどうなっているのか日常生活とのかかわりはどうかなどを把握する必要がある。

意識と無意識についてであるが、無意識も意識も意識状態を表すことであり、無意識は意識できない意識状態、意識は意識できる意識状態であり、価値判断によって自分が作り上げたものともいえる。

自己像（自己概念・セルフイメージ）は主体としての自己が客体としての自己についてイメージを形成したものである。すなわち意識的自己像は自己がある価値判断で形成した自分であり、ある価値観から判断した自分と言える。意識的自己像は、自己が抱く自己についての側面をより意識するように働きかけさらにそれにあった振る舞いをするように自己に働きかけていく。それに対して、無意識の自己は価値判断から解放されたもので操作せずに自分が自然に自分を捉えているものと言える。すなわち、良い悪いではなく、自分が体験した事柄を無意識のうちに捉えて自然に自己像を形成していく。したがって、意識的自己と無意識的自己が一致している場合もあるが、一致していないことも多いものである。

3) 自己像の形成と成立の要因

オルポートは、自己は段階的に発達して、成熟度を増していくと考え、ロジャーズは、自己は絶え間なく変化する経験の世界での存在や機能に対する意識であると考えた。自己像の成立要因については、豊田らは、①他者からの評価や承認による気づき、②同一視に基づく取り入れ、③役割遂行やさまざまな経験による気づきの3つを挙げている（豊田ら 2000）が、自分自身の自己に対する観察と評価（それまでの経験や知識による）、周囲の人々からの言葉や自分に対する態度などから形成されると言えよう。また、成育上の環境や出来事の捉え方によっても修正され形成されていくものと思われる。したがって、幼児期の自己像と子ども時代、青年期、成人になってから、あるいは高齢者になってからと様々な体験から変化していくものでもある。しかし、幼児期に形成された基本的な自己に対するイメージが生涯にわたり、その個人の生き方に影響を与えているのではないかと考えられる。自己像の成立の要因を詳細に把握するためにはいくつかの事例を丁寧に見ていく必要がある。そこで量的研究で意識された自己像と無意識の自己像との関連を見たのちに特徴的な事例について質的研究を行う。

3. 質的研究～脚本分析の採用

個人の在り方に対する質的研究の方法は、個人の生き方や人生を検討するものとしてライフストーリー分析、ライフヒストリー研究、ライフコース研究、事例

研究などがあり、その他の質的研究としてはアクションリサーチ、エスノグラフィ、カテゴリー分類、Modified Grounded Theory Approach(M-GTA)など様々あるが、本研究では、自己像の成立過程を把握するため交流分析理論における脚本分析を中心に検討する。

ライフストーリー研究はナラティブモデルに位置付けられ、どのように人生経験が構成され、意味づけられているかを分析するが、脚本分析もどのような感情体験がその後の人生に意味を与えるかということで観点は似ていると言える。ただし、脚本分析はいくつかのポイントに焦点を当ててそのことがどのようにその後の人生に意味を持つか等を分析していくものである。

交流分析及び脚本分析については後述する。

第2章 研究の意義と目的

1. 研究の意義

高齢者が生き生きと日常生活を送るためにはまず高齢者のメンタルヘルスの向上を図ることと、適切な高齢者支援を行うことが期待される。

心身の健康、特にメンタルヘルスを考える場合、健康状態に対する主観的認知や自己評価が大きく関わりとされている。したがって、現在の高齢者を対象に高齢者が自分をどのように捉えているかについて把握しておくことが必要であると考えている。

今回は、地域在住の適応的に日常生活を送っていると思われる自立高齢者を対象に調査を行った。ここでの対象者は、認知症を発症していず、日常生活機能が保たれていて精神的に自立した日常生活を送り積極的に社会参加している高齢者とした。対象者の自己評価や自己像を中心とした心理的側面などを検討し、メンタルヘルス向上の要因の解明につなげ、うつ状態などによる不適応状態の高齢者への介入や支援の方法の参考にするなど、今後の高齢者のメンタルヘルス向上や適切な支援・介入の方法の検討を行うことが必要と考えられる。

また、ライフコース研究の視点からも、高齢者支援では、特に対象者それぞれが生きてきた在り方によって価値観、考え方が大きく異なり、個別に対応しなければならない側面も大きいと言える。そこで、いくつかのケースを丁寧に検討することで、一律でない介入や支援の方法の配慮にも役立つものと考えている。

高齢者の自立についての定義だが、自立には、身体的自立、精神的自立、社会

的自立の3側面が言われている。ここでの適応的自立高齢者とは、この3つの側面が保たれていて日常生活機能が保たれており何らかの形で積極的に社会参加していることとした。

2. 研究の目的

本研究では、高齢者のメンタルヘルスの向上を目指し、適切な介入や支援の方法を検討するために高齢者の心理的側面、特に自己評価と自己像を詳細に把握することを目的とする。

今回は、適応的に日常生活を送っていると思われる自立高齢者（認知症と診断されておらず、生活機能が保たれている）を対象に生き生きと適応的に生活している高齢者、Schrock の言う *privileged aged* すなわち優秀老人（柴田 2017）の自己像の特徴を調査し、メンタルヘルス向上に影響する要因を解明する。

3. 研究デザイン

高齢者を対象に量的研究として、意識された自己像と関わる自己評価、自己の在り方、特に自分の生き方や現在の生活に対する満足感などが把握できる主観的幸福感尺度と無意識の自己像が示される投影法心理テストのバウムテスト（樹木画テスト）との関連を調査し、併せて、現在の感情状態としてうつと不安についても調査を行い、その結果いくつかのパターンの中から特徴的な傾向を示す高齢者を対象にバウムテストにより把握した無意識の自己像を検討し、どのような成育歴から現在の自己像が形成されたのかを脚本分析を用いて質的検討を行う。

主観的幸福感を測定する指標として、社会老年学の領域で使用されている尺度に改定 PGC モラールスケール（the Philadelphia Geriatric Morale Scale）（前田 1979）や生活満足度尺度 LSIA(Life Satisfaction Index A)等がある。その他にも何人かの研究者による尺度の紹介や検討したものもある（和田、岡本、杉山ら）が、今回の調査で使用する主観的幸福感尺度は、2003年に、伊藤裕子らによって作成されたもので、WHO が開発した心の健康自己評価質問表 SUBI(Subjective Well-Being Inventory)から抽出された15項目の尺度である。

「人生に対する前向きの気持ち」や「至福観」など直接自己像を示すものではないものも含まれるが、「自信」や「達成感」、など自己認知に関する項目は自覚的な自己評価であり、自己の在り方、自己の認知や感情に対する捉え方であり、広い意味で自己についての意識的認知、自己像と捉えて実施した。

バウムテストは、カール・コッホ (Karl Koch) によって 1920 年代に心理テストとして確立された投影法テストである。対象者に木を描いてもらい、その描かれた木から描き手のパーソナリティを把握しようとするものである。

描画の分析によって把握するのは自覚されていない自己の在り方、感情や思考、反応（行動）、葛藤等無意識の自己像である。分析や解釈は他の投影法と同様に主観的になりやすい面もあるが、これまでの様々な研究の結果を参考にして、多くの事例を見ていくと様々なパーソナリティを把握でき、描き手を理解するのに役立つものである。

第3章 研究

1. 研究Ⅰ

主観的幸福感とバウムテスト（樹木画テスト）の指標との関連

1) はじめに

心理的側面を把握するためには意識されていない面をも把握することが必要である。

高齢者の心理的状态を把握する研究はいくつかなされているが、投影法心理テストによって無意識の心理的側面や心理状況を把握しようとする研究は少ない。特に無意識の自己像を示すと考えられるバウムテストによる研究は地域で生活しているいわゆる自立高齢者を対象としたものは CiNii Articles で検索するとわずか3件である。

ここでは投影法テストであるバウムテストを用いて、対象者の無意識の自己像と意識されない心理状態を把握しようとする。バウムテストではパーソナリティと心理的状态が把握できるが、バウムテストの描画に示される指標と気分状態と意識された自己評価であり、メンタルヘルス指標の一つと考えられる「主観的幸福感」とに関連が見られるかを検討する。

2) 研究の目的

意識的操作がしにくい描画（バウムテスト）によって、無意識の自己像や感情を把握し、質問紙検査によって捉えた感情状態、さらに主観的幸福感尺度によって意識的に捉えている自己の生き方や満足度、生活状況との関連を把握することで、高齢者の心理的側面の多様性の一面を把握しようとする。

使用するテスト：①バウムテスト ②うつ尺度（SDS）③不安尺度（STAI）

④主観的幸福感尺度（WHO-SUBI を基に作成された15項目）

バウムテストによって検討する指標：統合性・安定性・全体的印象・精神的エネルギー・社会的つながり、現実生活とのかかわり、自我統制力、うつ、不安、傷つきやすさ、外傷体験、本能的エネルギー等

3) 対象と方法

対象

65歳以上で心身に大きな問題が無く認知症を発症していない自立高齢者 153名（男性58名、女性95名）、年齢65歳～90歳（平均年齢70.92歳 SD5.86）

で、仕事に従事（常勤・非常勤・自営を含む）、地域活動に従事、ボランティア活動に参加、趣味のグループへ参加、学習や習い事など何らかの形で社会活動に参加している人である。

対象は、研究担当者の関わりのあるグループと知り合いのグループ、老人大学の参加者等に協力を依頼し承諾の得られた人である。

方法

以下の4種類のテストを実施した。

- ① 現在の自分の生活に対する意識的自己評価である「主観的幸福感尺度（WHOが開発した心の健康自己評価質問紙 Subjective Well-being Inventory：SUBIを基に作成された15項目）」、
- ② 感情についての質問として「自己評価式うつ尺度 Self-rating Depression Scale：SDS 20項目」
- ③ 特性不安と状態不安の両方を測定する「不安尺度 State-Trait Anxiety Inventory：STAI 各々20項目計40項目」
- ④ 無意識の自己像が把握できる投影法描画心理テストである「バウムテスト Baum Test（樹木描画法）」

結果の検討の方法

- ① 現在の高齢者のバウムテストに示された特徴を把握する
- ② バウムテストの各指標を点数化し主観的幸福感尺度得点との関連を検討する
- ③ バウムテストの各指標と、うつ得点、不安得点との関連を検討する

15項目からなる主観的幸福感尺度は3項目ずつ5つの因子で構成されるが、各因子は、人生に対する前向きな気持ち（満足感）、自信、達成感、失望感（逆転項目）、至福感であり、各因子の得点と幸福感全体の得点を算出した。得点は1～4点で15項目の最高得点は60点。得点が高いほど主観的幸福感が高いことを示す。

SDSは、20項目で1点から4点で合計点を算出し最高得点は80点。点数が高いほどうつ状態にあることが示される。50点以上がうつ状態と判定される。

STAIは、特性不安と状態不安の2側面を調査し、各20項目ずつ1点から4点で採点する。それぞれ80点が最高得点であり得点が高いほど不安が強いと判定する。さらに得点はそれぞれV段階で評価されV段階が不安が非常に高いと判定される。

バウムテストは、描画全体の評価とされている「全体印象」、「統合性」、「安定性」

を中心に、「エネルギー」、「幹の太さ」、「枝の広がり」、「根と地面」を点数化した。評価は各指標に対して、－ 0 ± 5 で評価し、統計的处理がしやすいようにそれぞれ1点、2点、3点、4点、5点と得点化した。（注：幹の太さの項目で、描画が枝のみで幹が書かれていないものは、幹の太さ0とし、5段階評定では－とカウントした。）評価は信頼性を検討するためバウムテストに精通した3人の臨床心理士が各自で採点し一致度を検討した。

その他、「自我統制力」、「社会的つながり」、「現実社会との関わり」を示す指標のチェック、「うつ指標」、「不安指標」、「傷つき易さ」、「外傷体験」、「攻撃性」、「本能的エネルギー」の指標をチェックし、「病的サイン」の有無をも検討した。

4) 結果

①主観的幸福感、合計の平均が 45.5(4.8)であり、先行研究における大学生の平均 40.4 より高得点であった（伊藤ら 2003）。

②SDS 得点は平均 36.4(8.1) であり、カットオフポイントの 50 には全く及んでいなかった。

④ STAI は、特性不安得点の平均 37.3 (9.1) III段階(普通)、状態不安得点の平均 36.1(8.4) III段階（普通）と共に低く、不安傾向はみられなかった。

⑤ バウムテストの結果は、全項目の平均 18.9 点、3 項目が 8.2 点であった。平均するとほとんどの指標で 3 点に満たず 3 を普通とすると評価得点は余り高くはなかった。そのうち、描画の評価として重要である全体印象、統合性、安定感の 3 項目の合計点では 8.2 とやはりかなり低かった。検討したところ、得点が低いものが多かったがばらつきが多く、全体に高い得点のものもあり一定の傾向はみられなかった。3 人の臨床心理士の評価では、ケンドールの一致係数（W）で、各項目 0.6～0.7 程度であった。合計点の一致率はケンドールの一致係数（W）が 0.8 であり、3 者の評価は一致していたと言えるのでこの評価得点を採用した。

相関分析の結果、SDS と STAI は特性不安で相関係数 .52、状態不安で .5 と 1 %水準で相関があり、両テストと主観的幸福感とは SDS で-.5、特性不安で-.6、状態不安で-.4 と 1 %水準でマイナスの相関があった。SDS の合計得点、STAI の状態不安と特性不安の各得点と主観的幸福感の各因子、主観的幸福感の合計点とバウムテストの各項目との相関を見るため、各変数間の相関分析を行った結果、主観的幸福感得点とバウムの指標にいくつか

有意な相関が認められるがごく弱い相関しかなかった。

バウムテスト指標のうち描画の質を把握し全体的評価を決める「全体印象」と「統合性」、「安定性」の 3 つの指標の合計点も算出して相関を検討したが、

至福感のみ弱い相関があったものの他は全体的に相関はみられなかった（表1）。

表1 バウムテストの各指標と主観的幸福感の貝尺度得点との相関分析

	主観的幸福感					
	満足感	自信	達成感	失望感	至福感	合計得点
バウムテスト						
全体印象	.03	.01	.03	.00	.20 [*]	.08
統合性	-.02	-.00	.04	.00	.21 [*]	.07
安定性	.04	.05	.13	.21 [*]	.17 [*]	.17 [*]
エネルギー	.11	.12	.10	.02	.18 [*]	.15
幹の太さ	.16	.03	.09	.05	.00	.09
枝の広がり	.10	.08	.12	-.05	.21 [*]	.13
根と地面	.04	-.04	.01	.02	-.03	.00

5) 考察

施行した尺度、心理テストの結果、今回対象とした自立高齢者の特徴として、自覚的に自分の生活状況をとらえていると考えられる「主観的幸福感」は、各領域共やや高得点であり、現在もこれまでの人生にも自覚的に満足していることすなわち自己評価としてかなりポジティブに捉えていることが示されていた。

また、うつ尺度の得点も低く、感情障害傾向はみられず、不安尺度の結果からも特性不安、状態不安共に低いことから不安感も低いことがうかがえた。相関分析・重回帰分析の結果、主観的幸福感はうつ感情や不安感との逆の関連が示された。

すなわち、自立して何らかの形で社会参加している高齢者は、意識的なあるいは自覚としてほとんど問題が無いことが示されていた。特に主観的幸福感では大学生の得点を上回り、これまでの人生にも現在の在り方にも自分に対して非常に満足している様子が示されていた。大学生と比較して高得点であったことは、高齢者は人生の統合期・充実期であることから当然の結果とも考えられ、今後は一般社会人や高齢者全体の幸福感的得点も調査することが必要であろうと考えられた。

一方、バウムテストの各指標と各変数との関連はほとんど見られなかった。その理由として、各変数が捉えようとする意識レベルの違いが考えられよう。

無意識のパーソナリティを示すと考えられているバウムテストでは、パーソナリティの統合性や安定性を測る指標においてかなり低い値を示すものが見られた。今回評価指標とした7項目のうち、「全体印象」は創案者のコッホも描画の第一印象が重要であるとしているように、表現されたバウム（樹木画）が無意識の自己像を投影すると考えると非常に重要な指標であることが分かる。また、「統合性」はパーソナリティの統合性（自我の統合性、感情の統制力、環境への適応など）が示されるものでこの指標も表層的な意識レベルより深いところでの自我の在り方、捉え方が把握できるものといえる。さらに「安定性」であるが、この指標は個人が現在の状況の中でいかに安定して過ごし精神的安定感を感じているかを推察することにつながると考えられる。つまりこの3つの指標がパーソナリティの在り方を示すものとしてかなり重要であるといえよう。

コッホをはじめとして、ボーランダー（Bolander,K）や高橋正春など多くの研究者が描画の全体的印象を重要なものとしてとらえており、描画の空間的側面（画面のどの位置に描かれているか）での解釈でも描画の質（全体印象や統合性、安定性などから把握することが多い）によって解釈が変わってくることが述べられている。そこで今回も「全体印象」「統合性」「安定性」に重きをおいて採点した。

今回の対象者で、幹の太さが細目になっていることから、幹の太さにも示される心的エネルギー量は、実際に生き生き社会参加している高齢者であっても主観的なエネルギーや自覚的エネルギーと同様ではなく、実際は年齢通りに減少していることもあることが示されたといえよう。

「枝の広がり」は、社会とのやり取りを示すものと考えると得点が余り高くなかったことから、伸びやかさに掛けることが予想され、本人が意識しているより社会との関わりで生き生きとした関わりに欠けるのかもしれない。

また、「根と地面」であるが、これは現実の社会との関わり方を示すものと考えられており、現実の状況を客観的にとらえて適応的にかかわっているかどうか、現実検討力はどうかなどを把握する指標となるが、地面が描かれていないケースも多かった。このことから、自覚的に現実を客観的に捉えて現実を検討していると考えているのと実際との差があることもうかがえた。

ただし、バウムテストに関しては平均すると予想外に点数が低いものが多かったが、全体的に得点にかなりの幅があることがわかった。つまり総合すると低い得点のケースが意外に多かった半面、非常に得点の高いケースも存在するのである。バウムテストを全体的印象・統合性・安定性の合計点で3群に分け幸福感の合計得点の高群、中群、低群に分けて度数を算出し、 χ^2 二乗検定を行ったが、有意差はなかった。したがって、無意識の自己像を把握する投影法テストであるバウムテストでは他のテストと同じように平均得点から評価することはできな

いということが分かった。

いうまでもなく、主観的幸福感の主観的なものであり、自分が自分の状態を幸福だと主観的に捉えている状態を把握するものであり、意識レベルは非常に高いものである。場合によっては、はっきり意図的ではないものの、そのようにありたいという思いから高得点の方へ○をつけてしまうということも考えられる。

また、SDSやSTAI は自分の意思で意識的に設問に答えるもので質問内容がダイレクトではない分、主観的幸福感より自分の意思通りではない部分もあるだろうがこれも意識レベルは低くはない。

それと比較すると、バウムテストは、投影法心理テストであり、意識して自分の状態を表現しているものではない。無意識の自己像が表現されるというコッホの理論のように、無意識の自己の状態や感情や葛藤が表現されているものである。したがって、意識レベルは先の両者と異なりかなり低い、前意識から無意識レベルである。

つまり、他の心理テストと相関がないのもうなずける。対象によっては他のテストと相関があり、対象によっては部分的な相関、あるいはまったく相関がない場合もあることになる。これらの個人差の要因が何であるのかを調べる必要性は高い。

主観的幸福感尺度（合計）とバウムテスト（3指標合計）の各々の高低による人数を見ると、主観的幸福感が高いが、バウムテスト得点が低いものが37%、主観的幸福感が普通でバウムテスト得点が低いものが41%と両テストに乖離があることが少なくない事が見られた（表2）。

表2 主観的幸福感とバウムテスト3指標(全体印象,統合性,安定性)との関連

バウム 主観幸福感	高	中	低	合計
高	11(23)	10(31)	23(37)	44
中	26(55)	12(38)	26(41)	64
低	16(34)	10(31)	14(22)	40
合計	53(100)	32(100)	63(100)	148

数値は人数 ()内は%

χ^2 乗結果:n.s.

注

主観的幸福感 低:M-0.5SD,中:M-以上 M+0.5SD 未満、高:M+0.5SD 以上

バウムテスト 低:M-0.5SD,中:M-0.5SD 以上 M+0.5SD 以上,高:M+0.5SD 以上

6) まとめと課題

実施した主観的幸福感尺度、うつ尺度、不安尺度、バウムテストの4つの尺度間に関係があるかどうかを検討した結果、主観的幸福感とうつ尺度、不安尺度にはマイナスの相関がみられ、幸福感の得点が高ければうつ尺度や不安尺度は低いことが予想され当然の結果と考えられた。

しかし予想では、どのテストも相関があると考えたが、無意識的なパーソナリティ、自己像については逆の結果となった。

これは先に述べたように、各テストが自覚的あるいは意識的レベルに違いがあるためと考えられる。

今回の対象者は実際に生き活きと社会参加し、自分でも自覚的には活力もあり、社会適応も良く、問題はないと捉えているようだが、実際は無意識のところではいくつかの問題を示している場合も多いようであった。

一方で少数ではあるが無意識のパーソナリティでも問題が見られなかったケース、まずまず問題が無いと考えられるケースも散見された。

今後の問題として、心理テストの種類による測定を意識レベルの違いに注目し、各々のケースについて差の要因を把握することが重要であると考えられる。

具体的には、意識レベルでも無意識レベルでも自己評価が高いケース、意識的に

は高い自己評価を示すが無意識の自己像が低いケース（今回の調査で多く見られたケース）、意識的には自己評価が高くないが無意識レベルでの自己像は問題が見られないケース、意識的自己評価も無意識的自己像も低いケース（ほとんどいなかったが）をそれぞれ詳しく分析し、各々の結果の要因を調査することが重要であろう。

把握された高齢者の特徴を踏まえて、無意識の自己像をはじめとする無意識の感情や葛藤などについて解釈し、研究Ⅱで行う質的研究の対象者の理解につなげる。

高齢者のテストについては、前期高齢者（65歳～74歳、118名）と後期高齢者（75歳以上、34名）について比較した。

比較した項目は、主観的幸福感の得点とバウムテストの全体的印象、統合性、安定性、エネルギー、幹の太さ、枝の広がり、根と地面の7項目。

さらに、高齢者（今回の対象149名）と大学生（18歳～23歳、221名）を対象に、バウムテストの特徴について検討した。

検討した項目は、幹の太さ、はみだし、画面の向き、樹冠の有無、根の有無、地面の有無の6項目である。

前期高齢者と後期高齢者では、主観的幸福感では、前期高齢者が45.17（4.27）後期高齢者が46.73（4.91）であり、後期高齢者の方がやや高めの得点であったが、有意の差はなかった。

バウムテストの比較では、全体的印象と統合性のみ後期高齢者が得点が高く、その他は前期高齢者の得点が高かったが、これも全体として優位の差はなかった。このことから、高齢者になるほど主観的幸福感が高く、無意識的にも自己像が統合されていることが推察された。その他の項目での心的エネルギー量や、社会的つながりなどは高齢になるほど減少することが予想された。しかし差はわずかであり確定的なことは言えない。ただ、高齢者と大学生との比較でも同様の結果が示され、年代によってバウムの特徴が示されることが示唆された。

高齢者と大学生との比較では、幹の太さ2.1cmと4.6cmでt検定の結果、高齢者より大学生が有意に高かった（ $p<.001$ ）ことが示されていた。

他の項目は χ^2 乗検定の結果、はみだしが大学生で有意に多く（ $p<.01$ ）、画面の向きは大学生で横向きが有意に多く（ $p<.01$ ）、樹冠は大学生が有意に多かった（ $p<.01$ ）。根と地面の描写については差がなかった。

バウムテストの結果で幹の太さに差があったことは、実際のエネルギー量の違

いが示されたと思われる。したがって、年齢による実際のエネルギー量が描画の幹の太さによってある程度把握できるものといえよう。

用紙の向きについては、木が縦長の立像であることから用紙を縦に描くのが一般的と言われているが、横向きの解釈として、おかれた環境に対して不適応感や不満感を感じているといわれているが、大学生で横向きが多かったことは高齢者と比較して現状や置かれた環境に対して自分のおかれた位置に対して違和感を持っていることが示唆された。

樹冠の描写に関しては、文化的影響が推察される。大学生は樹冠をイラスト的に描くものが多く、時代的に実際に自然の木に触れる機会の少なさも考えられる。そのため、木をイメージしたときにイラスト的な木が浮かび雲形や円形の樹冠を描いたのではないかと考えられた。高齢者は現在は実際の木に触れる機会は少なくとも成育歴上で実際に木を見たりする機会が多くイメージしたときに自然な木をイメージすることができたと思われる。

以上の調査結果も踏まえて事例の解釈につなげていく。

2. 研究Ⅱ

高齢者の無意識の自己像及び主観的幸福感と成育歴との関連 ～交流分析理論における脚本分析を用いた質的研究

1) はじめに

研究Ⅰで主観的幸福感尺度による意識された自己像とバウムテストによる無意識の自己像との関連を調査した結果、両者は必ずしも関連しない事が示された。そこで、特徴的な事例について詳細に検討するべく脚本分析による質的研究を行うこととした。

2) 研究の目的

自己評価である意識的自己像と無意識の自己像について、その成育歴における成立要因を調査すること。

無意識の自己像によって個別の考え方や価値観、適応困難場面への対応の仕方等に違いがあるかどうかを検討すること。

意識的自己像と無意識的自己像と成育歴の三者にどのような関連があるかを明らかにすること。

3) 対象と方法

対象

65歳以上の高齢者で、認知症の診断を受けたことが無く、生活機能が自立している人、(認知症については自己申告、日常生活機能については老研式活動能力指標が基準を満たすことによって、面接による応答可能な心身共に自立した高齢者とみなす)、さらに何らかの社会参加(仕事、地域活動、学習、ボランティア、趣味のグループ、習い事など)をしている人
9名である。

方法

バウムテスト(樹木画テスト)と主観的幸福感尺度の調査を実施した。

交流分析理論の脚本分析の手法を用いて半構造化面接によるインタビューを行った。

(1)) 交流分析について

交流分析は、1950年代に米国の精神医学者エリック・バーン(Eric Berne)

によって創始された自己分析、対人関係分析の理論である。精神分析を土台にしているが自己分析にとどまらずコミュニケーションの在り方を分析し、人が他との交流によって成長し変化することに力点を置いている。

すなわち、交流分析は、パーソナリティ理論でもあり、コミュニケーション理論でもあり、成育歴からどのようにパーソナリティ（自我）が形成されたかを見るという点で発達理論でもあり、不適応や精神的問題の要因を解析する点で精神病理学理論でもありそれらを基にしたシステムティックな実践的な心理療法でもある。

交流分析では、①自我の構造分析（パーソナリティの分析）、②交流分析（他とのコミュニケーションの仕方、メッセージのやり取りの分析）、③ゲーム分析（こじれる人間関係の分析）、④脚本分析（生き方の分析）の四つの分析を基本として行う。

このうち脚本分析は、成育歴を知ることによって人が自分をどのように位置づけ（どのような自己像を描いているか）、どのような生き方をして日常生活を送っているかを分析するものである。このことから、対象者の現在の生き方、適応状態がどのような成育歴から形成されたかを知ろうとするのに役立つ。

交流分析の理論は以下の3つの哲学的前提に基づいている。

- ① 人は誰でも、自分で考える能力を持つという「人間観」
- ② 人は誰でも、自分の運命を変えることができるという「人生観・運命観」
- ③ その状況は変えることができるという「変化観」である。

これらの考えは脚本理論の理解へとつながるものである。

この研究では、高齢者がどのような人生を歩んできたのか、どのような自己像を持っていて、自分の生き方をどう捉えていて、現在の適応状態はどのような要因によるのか、思考・感情の処理、行動（反応）が形成されたプロセスはどのようなものか等を交流分析の理論を踏まえて把握しようとする。

（2）脚本について

交流分析の創始者であるバーンによれば、脚本とは、人生脚本とも言い、無意識の人生計画である。脚本は子ども時代早期に親から与えられた有言無言のメッセージにより形成された幼児の脚本信条（思い込み）による脚本決断に基づいて発達し進行していく一つのプログラムである。これは、人生の重要な面でその人の行動を指図するものである。この幼児の決断は大人の論理的な現実吟味による決断とは異なり、その場の感情から生じるものであるとされている。

養育者（主に親）からのメッセージには、親も意識せずに子供に対して与えている「禁止令」（～であってはいけない）や躰として言っている親のモットーや家訓等に代表される「拮抗禁止令」（～しなければならない、すべきである）がある。子どもは、これらのメッセージの影響を受けるのである。さらに、親は「禁止令」と同時に「許可」も与えていることが多い。結局、いろいろな「禁止令」や「許可」、そして「拮抗禁止令」の複合と、それに対する反応としての決断が脚本の基になると考えられている。

ドライバーは、親の拮抗禁止令（ドライバーメッセージ）によって個人の中に形成され、その行動を支配するもので禁止令によって生じる内的ストレスに対応する。人が行動するときに短期間に観察できる行動である。ドライバーと言われるものとして、・完全であれ、・強くあれ、・他人を喜ばせろ、・一生懸命せよ、・急げの5つが挙げられる。

子どもは無力であるので、親から見放されないように、親からの愛情を得るために、あるいはストレスフルな状況からサバイバルするために親からのメッセージに従ってしまうのである。その決断は大人のように現実吟味に基づいたものではなく、その場での子どもの感情と思い込みによるものである。

例えば、「女の子はニコニコしていなければいけない」という父親からのメッセージを受けた女の子は父親の愛情を失わないために、嫌なことがあってもその感情を抑えてニコニコしてしまう。その行動が父親の愛情を失わないためのサバイバルな行動だからである。しかし、それは本来の感情を抑えた偽の感情である。こうした体験がその後の生き方に影響を与えてしまうのである。

また、親から「お前は本当に仕方のない子」だというメッセージを与えられると「自分はどうしようもない子どもなのだ」という自己像を持ちやすい。長じていろいろな体験をしてもその脚本信条から抜け出せず、良い体験に遭遇してもそれを活かすことができなかつたりする。結局大人になっても子どもの頃の自分の反応や行動を無意識に繰り返し、自己像も変化しないままとなってしまうこともあると言われている。

しかし、人はいつも脚本に振り回されているわけではない。脚本に従ってそれを演じたり、そうでなかったりもする。また、交流分析の哲学にあるように人は自分の生き方を自分で考え自分で決めているのであり、親からのメッセージを受け取らないことも自己決定であり、親からのメッセージに従うかどうかを最終的に決めるのも自分自身であり、他人や環境からの圧力を受けた場合でもそれに従うかどうかは自分自身が決めるのである。また、脚本行動が適応的に生きるのに役立たないことに気づけば新しい適切な決断に変えることもできるのであ

る。

人が脚本に縛られて行動してしまうのは、普段は意識していないがストレスの下で、無意識に脚本信条を再現し、脚本の筋書きに従ってしまうと言われている。人がネガティブな脚本を演じやすいのは、①「今、ここ」の状況がストレスである時と、②「今、ここ」の状況が子ども時代にストレスを感じた状況に似ている時と言われている。

（３）脚本分析

脚本を分析するには「それがどのように形成されたか」を知る視点と「それがどのように維持されているのか」を把握する視点の両方が必要である。

すなわち、脚本の構成要素の起源を明らかにする「内容分析」と人が実際の人生でどのように交流しているかを把握する「脚本の機能（過程）分析」である。

脚本分析は、その幼児期の親からのメッセージの受け取り方で自分の人生の生き方である脚本をどのように書き、現在まで、その影響をどのように受けて生活しているかを明らかにしようとするものであり、現在の生き方が適応的でない、あるいは満足 of いくものでない場合、自分の脚本に気づくことで生き方を適応的に変えることができるとするものである。

基本的構えは、人や状況に対するその個人の認識の仕方であり、幼児期の体験によって形成されると言われている。基本的に４つの構えが挙げられている。

- ① 自己否定、他者肯定（I am not OK, You are OK.）
- ② 自己肯定、他者否定（I am OK, You are not OK.）
- ③ 自己否定、他者否定（I am not Ok, You are not OK）.
- ④ 自己肯定、他者肯定（I am OK, You are OK.）

である。親から存在を承認され、自分の存在に自信をもち、愛情を注いでくれる親を信頼することから始まる４つ目の構えが望ましい。しかし、ずっと同じ構えでいるわけではなく状況によって移動はする。ただし、基本的に自己否定や他者否定の構えを持つとそれが生き方（脚本）に影響を与えてしまうと言われている。

脚本のパターンには、「勝者の脚本」と「敗者の脚本」とさらに「勝てない（平凡な）脚本」と言われるものがある。ある程度自己実現して満足している適応的な生き方をしているのが勝者の脚本であり、思い通りにならず不満足感を持った不適応感のあるものが敗者の脚本である。勝てない脚本は、明確に自己実現は

していないが、しかし大きな問題はなく平凡に過ごしている、ただし、どこかで「いまいち」な感じを持っている脚本である。それぞれの脚本はその個人の様々な面で異なることもある。たとえば、仕事については事業に成功し自己実現し勝者の脚本であるが、対人関係では思い通りにはいかず敗者の脚本である場合もある。仕事や勉強、社会的立場、人間関係とそれぞれについて脚本が描かれるともいえる。しかし、結論としては総合しての脚本がどのようなパターンであるか判断されるものであろう。

幼児期からの養育者との関係からそれらが形成されるものだが、交流分析は心理療法的に用いられることが多く、自己不適應の要因に気づき、より良い方向へ変化し成長していくことを目的としている点から、どちらかという不適應感のある生き方である敗者の脚本を取り上げていることが多い。そのため脚本をネガティブな点として捉えている研究が多い。しかし、実際は生き方全てがネガティブな脚本の支配ではなく、また、全てが問題が無い脚本とも言えない。割合の問題ともいえる。そう考えると適応的な脚本についても丁寧にその形成要因を把握しておくことが重要であると考えられる。

脚本のプロセスパターン

脚本は概ね6つのパターンに集約されると考えられている。時間の経過から見た6つのプロセス脚本は以下が挙げられている。

① [～までは]脚本

例として、「仕事を済ませるまでは、楽しむことはできない」

② [～の後では]脚本

例として、「今は楽しむことができるが、後できっとその償いをしなければならない」

③ [決して～]脚本

例として、「一番欲しいものは決して手に入れることはできない」

④ [いつも、いつも]脚本

例として、「どうして自分にはいつもこんなことが起こるのだろう」

⑤ [もう一歩のところで]脚本

例として、「もう一歩のところで上手くいくところだったのに」

⑥ [結末の無い]脚本

例として、「一生懸命やったが先はどうなるか予定が立たない」

(4) インタビューガイド

対象者へのインタビューは、インタビューガイドに沿って行ったが内容は以下の通りである。

幼児期の禁止令・拮抗禁止令・人生のモットー・座右の銘

幼児期の欲求阻害場面での対応の仕方、対応の仕方が変化したか否か、
変化した場合の時期、きっかけ、現在の対応の仕方

老年期の発達課題についての在り方（老いの受容、新しい役割の獲得、
これまでの人生の受容、死の受容など）
インタビューガイドは巻末に添付した

4) 結果の検討方法

- ① 主観的幸福感尺度とバウムテストについては、幸福感尺度の合計点を算出し、無意識の自己像が示されるバウムテストについては詳細に解釈を行った。その上で、主観的幸福感尺度に示されている自覚された自己評価とバウムテストによる無意識の自己像の相違点を検討する。
- ② 半構造化面接によるインタビューについては、インタビュー結果を逐語に起こし、各事例について脚本分析を中心に成育歴を調査し、現在の生き方に影響を与えている要因について詳細に検討する。
- ③ 脚本分析は、脚本の構成要素（禁止令、拮抗禁止令、脚本信条など）や脚本のタイプ、脚本装置、脚本システム、脚本プロセス等について分析を行う。
- ④ さらに、現在の生き方に影響したと思われる成育歴上の要因を把握するべくライフストーリーについても検討する
- ⑤ バウムテストの解釈・アセスメントから、無意識の自己像や感情の在り方と現在の生き方との関連を検討する。

バウムテストの解釈は、

はじめに、描画全体的な第一印象、統合性、安定感をチェックする。

次に、描画の特徴に注目する。

その上で、空間的側面として木のサイズや画面のどの位置に描かれているかを見て、空間象徴の理論から解釈する。

さらに、動態的側面として、筆圧やストロークなどについても筆跡学の理論を基にした仮説によって解釈する。

次に、各部分の特徴を把握し、その意味を精神分析の理論やこれまでの研究者の結果を踏まえてそれぞれの意味を解釈する。

最後に、全体的に描画全体を解釈し個人の無意識の自己像の在り方を把握する。

5) 事例の選定について

研究 I で SDS、STAI、主観的幸福感尺度及びバウムテストを実施した対象者と新たに、主観的幸福感尺度とバウムテストを実施した対象者のなかから、自覚的自己像と無意識の自己像との関係を調査することを目的として、

主観的幸福感得点（自覚された自己評価）が高く、バウムテストの評価得点（無意識の自己像）が比較的高いと思われる事例

主観的幸福感得点（自覚された自己評価）は高いがバウムテスト評価得点（無意識の自己像）が高くないあるいは低い事例

主観的幸福感（自覚された自己像がやや低く、バウムテストの評価得点（無意識の自己像）にやや問題がみられる事例に対して詳細な検討を行った。

今回の対象者は元気に社会参加していることで調査協力を依頼しているため、主観的幸福感得点（自覚的な自己評価得点）が低い人はほとんど見られなかった。2～3名の低得点の人からはインタビューの協力を得られなかった。そのため、当初の目的にもあるように、何らかの形で社会参加している自立高齢者が対象ということになった。

6) 各事例の検討

主観的幸福感尺度得点は、12～48点で示されるが、今回の対象者の平均が45.5（±2.4）点であったので、48点以上を高得点、43点以下を低得点とした。この事例対象者9例の平均は47.8点と高得点であった。↓

バウムテストは、今回は7～35点で評価されるが、7項目全体の平均は、19点であった、しかし評価点3が普通との評価となるので3点×7項目＝21点をカットオフポイントとし、評価として重要な3項目（全体的印象・統合性・安定性）は（ ）内に3項目の点数を示し、3点×3＝9点としカットオフポイントを9点とした。

各事例の特徴

	幸福感	バウムテストの得点
事例1：A.	55	31（14）
事例2：B	53	21（10）
事例3：C	43	23（10）
事例4：D	47	13（6）
事例5：E	47	23（11）
事例6：F	45	18（9）
事例7：G	46	27（11）
事例8：H	51	23（9）

事例 (網掛け部分はインタビューの逐語からの転記)

事例 1 A.さん 男性 75 歳

事例の概要

家族 妻 75 歳 娘 42 歳と孫 娘の長男 6 歳

原家族：両親、ひとりっ子。

戦争中に疎開先で母と幼児期を過ごした。父親は東京で仕事をしていて時々帰ってきた。両親とも非常に優しい性格で「～してはいけない」とか「～しなさい」と言われた記憶はない。戦争中ではあったが、自然の中で伸び伸びできる環境で食べものに困った記憶も余りない。終戦後、東京に戻り、画家や彫刻家など芸術家が集まる場所に住むことができ、そこで周囲から可愛がられ、幼児期から絵が好きだったので自然と絵描きになろうと思っていた。成育歴で自分が大きな影響を受けたのはその場所だと思う。そのまま 2 年間浪人はしたが芸大に入学、先生にも恵まれ、卒業後も大学院在学中に大手の広告会社と製造業の企業の 2 社に受かり、デザイナーとして製造業の企業へ入社。様々な経験をし、役員になり退職したが、現在も非常勤の教員や団体の役員などをしている。振り返ると自分は人や環境に恵まれていたと思う。感謝しかない。現在は、離婚した娘の子どもの面倒を父親代わりに見ているが、楽しんでやれている。

主観的幸福感、満足感 12 点、自信 12 点、達成感 10 点、失望感 11 点、至福感 12 点で合計 55 点とかなり高い得点である。

SDS 得点は 27 でうつは全く見られない、STAI では状態不安 33 点でⅢ領域、特性不安 31 点でⅡ領域と共に不安感はやや低めである。

バウムテストの評価得点は 35 点満点中 31 点、3 項目の得点は 14 と高い得点であった。

バウムテストの解釈

全体的印象は力強い、はっきりした、自信に満ちたものである。

描画の特徴は、画面中央にバランスよくしっかりと描かれている。実が多い、葉も丁寧に書かれている。全体に塗りつぶしてある。

空間的側面では位置も大きさも理想的と言える。おかれた環境の中で適応的に自分を発揮していることが伺える。動態的側面では、筆圧がやや強めで自己主張的であるが、ストロークは滑らかで適応的で穏やかであることが伺える。

内容的には、幹は適度な太さでしっかりとおり自我統制の良さ、感情統制の

良さが示されている。枝の張り方も左右と上方へ伸びており、エネルギーの流れもスムーズであり、社会との関わりも良いことが伺える。他への関心も強く、自己を外へ発信する欲求も強いことが伺える。実の多さから現実的な欲求も強く、やや自己顕示欲も示されている。塗り込みは鬱などの塗り込みとは異なり、エネルギーの発揮と考えられ、また、黒く塗りつぶされ実は赤い色を表していると推察される。実や葉の書き方から几帳面で真面目な面が示されている。根はしっかりと描かれてはいないが地面と接する所がかすかに広がり根の存在を示唆しており、現実との関わりも適応的であろうと思われる。やや客観性や現実検討力より独りよがりな面もうかがえるが問題になるほどではない。三次元的な表現もあり、能力の高さも感じられる。

全体として安定しており、生き生きしたエネルギーが示されており、自我や感情の統制力にも優れ、外界とのやり取りもスムーズで社会適応の良さが伺える。現実的な目的も多く実現可能性が高いが、やや自己主張的で自己顕示欲の強さも伺われる。しかしエネルギーの流れも良く、全体として適応的であり、無意識の自己像と自覚的自己像に大きな差はみられない。



Aさんのバウムテスト

脚本分析（インタビューから）

インタビュー内容から、脚本について検討した。脚本の構成要素としての禁止令は見当たらなかった。両親とのかかわりから禁止令よりむしろ許可を多く与えられていたことが推察される。拮抗禁止令としては、母親が病弱であったことから「体は大事にしてください」とはよく言われた。また、疎開先では母と二人であったことから、しっかりして母を守らなければならないということを父から伝えられていたかもしれない。それに伴って「全力を尽くせ、頑張れ」という拮抗禁止令を受け取っていた可能性はある。しかしこれはポジティブに働いていたと推察される。祖母（東京で一時期同居）にも可愛がられた記憶があり。物のない時代に祖母が新聞の4コマ漫画を切り抜いて紙縫りで綴じ、本を作ってくれたこと等が記憶にあるとのことで、その本を繰り返し読んだことで余計に絵が好きになったので絵を専門にするきっかけにもなったとのこと。周囲はみんな自分を可愛がってくれサポートしてくれた。ラッキーだと思う。自分の人生は感謝し

かないとのこと。

人生のモットーは「感謝」とのこと、座右の銘は「風姿花伝」、デザイナーであるので目に見えない風を花の姿に託して伝えるということ。脚本信条は「人は信頼できる」「自分はしっかり頑張る」であったと思われる。基本的な構えは「自己肯定・他者肯定」(I am OK, You are OK)であり、脚本のパターンは「勝者の脚本」と言える。脚本プロセスは、ひとつことが終わると次のことを早急にしないと気がすまない面があり、ネガティブではないが「～までは脚本」が推察される。

好きな物語は、「一寸法師」で小さいものが大きく成るとというのが気に入っている。自己成長が課題と考えられるがそれも自己実現できている様子。

病弱であった母も父の献身的な支え（家事もほとんど仕事の合間に父がしていた、朝食と昼食を作ってから出かけ帰宅後に夕食も作っていた）で、亡くなったのは80代半ばであった。父親は家族のためにも尽くしてくれたが仕事でも成功したので大変尊敬している。自分のモデルであり背中を追っているがまだ追いつかないとのこと。

やや自己顕示的な面もインタビュー時にみられ、またせっかちで積極的な面が強く、タイプAの傾向が感じられたが、それが、頑張るモチベーションになっていると考えられる。また、今までのところ心臓血管系の疾患は全くない。現在の家族関係も良好で画家として成功している妻とも尊敬し合っている。

脚本のまとめ

禁止令は無い、許可が多い。拮抗禁止令は「しっかりやれ」

脚本信条は「人は信頼できる」「頑張る」

人生のモットー：人に感謝する

座右の銘：風姿花伝 見えないもの（風）を見える花の姿に託して伝える

基本的構え：自己肯定・他者肯定

脚本パターン：勝者の脚本

プロセス脚本：「～までは」脚本

好きな物語：「一寸法師」自己成長を象徴している物語

脚本分析から、ネガティブな脚本は感じられず、勝者の脚本を実践していることが伺える。

バウムテストに表された無意識の自己像もほとんど問題はなく、安定した自己像が実現できている数少ない事例と考えられた。元気で活躍している要因は全てのことをポジティブに捉えているところにあると考えられた。

事例2 Bさん 女性 73歳

事例の概要

家族 夫 73歳、長女 44歳 次女 42歳。

原家族は、父、継母、弟の4人であったが、継母 92歳は現在施設入居中で時々訪問している。弟は数年前に亡くなっており、4年前に他界した父の遺産をBさんが全て相続した。

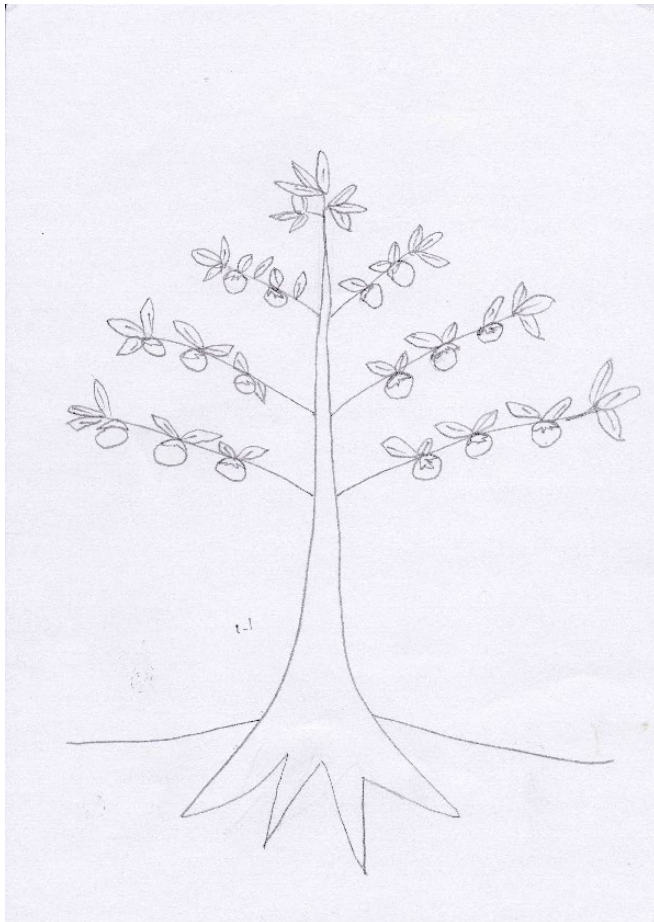
職業 現在は無職だが、実家の洋服製造販売会社を手伝っていた。50代から仕事は縮小し、「いのちの電話」相談員をしていた。

夫は、広告会社に勤務していたが、30代で転職しBさんの実家が所有する繁華街にある土地で飲食業をしていた。60代で、その土地を実家が売ることになり廃業した。それ以降は無職。

現在、子どもたちは独立し夫婦二人暮らしだが、ほとんど家庭内別居の形である。Bさんは、山登りが趣味で毎週のように友人と登山をし、外国の山にも登りに行き、アルプスでのスキーにも毎年のように出かけていて、非常に活動的である。健康状態も悪くなく、友人との付き合いも積極的で元気な高齢者であると言える。

主観的幸福感得点は、満足感 10、自信 10、達成感 10、失望感（逆転） 12、至福感 11、で合計 53 であり、自覚的には、自分の生き方や生活に満足しており、自覚的自己評価も満足 of いくもので問題が無いと認識している。

うつ尺度は 46 点とやや高めであるが、不安尺度では特性不安Ⅱ領域、状態不安Ⅱ領域で共に低く、不安は示されていない。バウムテストの評価得点は全体が 22 点 3 項目が 10 点だが低めである。



Bさんのバウムテスト

バウムテストの解釈

描画全体の印象は、可愛い感じの描画だが、未成熟な印象もある。ややアンバランスで、足を踏ん張り手を広げて踏ん張っている姿のようで、気を張って頑張っている感じである。統合性は特に悪くはないが良くは無い。安定感についても不安定ではないがゆったりした安定感を感じられない。

特徴は、太い根と上へ行くほど極端に細くなっていく幹。一線枝（一本の線で描かれた枝）である。

空間的側面は、画面のほぼ中心に配置されており、問題はない。

動態的側面は、筆圧は適度であり、ストロークも滑らかである。

部分的な特徴については、自我や感情の統制力を示すと言われる幹の細さが目立ち、全体として統制力がやや良くないことが示されている。また、上へ行くほど細い幹は幼児期の愛情欲求が満たされず愛情飢餓の指標ともされている。上部と比較して幹は下で広がり根っこの強調が見られる。根は無意識的あるいは本能的エネルギーを示すと考えられ内的エネルギーの強さが示されていると言える。しかし幹の太さのバランスの悪さから、根本的エネルギーをうまく昇華させ反映させることができていないことが示されている。

枝は社会へのかかわり方を表し一本の細い線で描かれた枝は成人での出現は稀であり、未成熟さを示している。その枝について実は枝の細さの割に大きくしっかりと沢山描かれている。実は目標や欲求や自己への評価、自己顕示あるいは成果を示すもので目標の多さ、成果の獲得の欲求が強いと考えられる。しかし、それに比して支える枝が細いので気を張ってそれらを保とうとするある種の緊張感が示されていると思われる。

葉は外界、社会と直接かかわるもので、社会との関わり方、対人関係、外界への自己装飾などが示される。すなわち、他への関心も強く他と関わりたい欲求も強く、自分を他へ示そうとする外面を飾ろうとする面も強いことが感じられる。地面は、社会との実際のかかわり方や現実検討力を表すが、描かれてはいるがどちらかというと真ん中がやや盛り上がった丘型であり、断定するほどではないが、孤立感や孤独感あるいは独立心が示されていることが分かる。

総合的解釈

以上の特徴から、対象者は、内的エネルギーが強く、何とか統制して、適応的に過ごしているが、無意識の自己感としては、幼児期の愛情飢餓感が残っていて、ストレス下では感情統制などが悪くなる面もある。また、未成熟な面もあり、自分を強く示したい自己顕示欲もあり、他へ働きかけてはいるが思い通りになってはいない面があるのではないかと推測される。それを無意識の自己像として感じ取っているので気を張って自己を示そうとする緊張感が描画から感じ取れるのではないかと考えられる。全体としての能力は高いことから日常生活では自覚的には大きな問題はないが、無意識の自己像が示すような問題点があるため、本人が頑張っているよりは周囲との問題があるかもしれない。

脚本分析（インタビューから）

10歳の時に実母は父親と離婚して弟とBさんを置いて家を出て行った。離婚は10歳時だが、幼少の頃より両親の中は悪く、実母はBさんがもの心が着いた頃から外で仕事をしていて、養育はお手伝いさんと婆やがしていた。食事もほとんど一緒にしたことが無い。Bさんが7～8歳の頃より実母はほとんど一緒にはいなかった。実母に養育された記憶はないとのこと。

実母と離婚後、父親はすぐに継母と再婚した。継母は全く子どもたちに関心を示さず、結婚する時の約束だからと養育には口も手も出さなかった。いじめられたことも無いがろくに話をしたこともないくらいだったので母親であるという気にはならなかった。食事もお手伝いさんが簡単に作り一人かあるいは弟と食べていて両親と食べたことはほとんどなかった。

父親もどちらかというと放任主義で躾をすることもなかったが、Hさんに「家

業を継いで社長になるのだからしっかり勉強しろ」とは厳しく言っていた。以上のエピソードから、脚本の構成要素として、母親からも父親からも「存在するな」と実母からも継母からも「近づくな」の「禁止令」が与えられたと言える。禁止令は、明確な言葉としてそのように伝えられることはほとんどなく、親の言動から子どもが感じ取るのだが、幼児期から母親が家に居ず、食事もし一緒にせず、使用人任せということは子どもにとって「あなたはいない」という存在拒否として受け取られる可能性が強い。また、継母や父親も養育しようとせず、話しかけもしないということは、「あなたとは関わりたくない、側へ来ないで」ということで「近づくな」の禁止令を与えられたと考えられる。

母親への愛情欲求はかなえられることが無く、父親や継母からも放任されていたため埋められることは無く愛情飢餓状態であったことが予想される。しかし強い性格から（インタビューの中での本人の言）それを自覚することも認めることもしなかった。しかし無意識に自分を捨てた母親の態度からも「人は信頼しない」「頼らない」という幼児決断がなされたと思われる。

インタビューの中でも「なんでも私が一番、他は全部ビリ」と述べているが、交流分析的に解釈すると、4つの基本的構え①I am OK、You are OK、

②I am OK、You are not OK、③I am not OK、You are OK、④ I am not OK、You are not OKのうち、自分を守るために、周りを否定する「I am OK、You are not OK」の「自己肯定、他者否定」の「基本的構え」を身に付けていたと思われる。つまり、自分が辛いのは、「自分は強く正しいが、相手が悪い」と捉えることで自分の心を守ろうとするのである。

父親からの「拮抗禁止令」は社長を継ぐのだから「しっかり勉強しろ、頑張れ」というものであった。それに対して心の中で反発し、絶対に父親の言うことは聞くものかと思い、「幼児決断」として早く「自立して家を出よう」と考えていた。そして自分を捨てた実母やフォローしてくれず継母の立場を尊重した父親に対して、「人は自分を見捨てる、信用できない、早く自立しよう」という幼児決断をしたと考えられる。

本が好きで、学校の図書室の本をほとんど読んでしまい、毎晩一人で読書をするという生活だった。そのせいか勉強はよくできたと本人は認識している。これについては、インタビューで「寂しかったんでしょうね」と述べており、両親とのかかわりの欠如から孤独であり本にのめり込んだと推測される。本を沢山読んだことも要因であろうが、勉強ができたのは「しっかりやれ」「頑張れ」という父親の拮抗禁止令が作用したとも考えられる。

小学校は区立だったが、中学で受験し、高校、大学とつながっている学校で過ごした。専攻は家庭科だった。

卒業後、絶対継ぐまいと思っていた家業を手伝うことにした。その後、社長は弟

が継いだが、そのまま家業を手伝っていた。その理由は自分でもはっきりしない。脚本分析から考えると、否定していても拮抗禁止令が強く作用し、「頑張らなければ、家業を継がなければ」という思いが強かったのではないだろうか。

父親から示された人生脚本を否定したが、いつの間にか無意識に自分の脚本として取り入れたのだと考えられる。

23 歳時に、現在の夫と大恋愛の末結婚、周囲から（両親）の反対を押し切った結婚であったようだ。その辺りと子育て中の事はインタビューでは触れられていない。

脚本のパターンは、仕事もある程度は家業を続け、社会活動も「いのちの電話」の相談員もし（これについてはとても誇りに思っている様子）仕事面や社会活動などでは自己実現しているという自負がある。また、仕事をしていない現在も、好きな旅行やスキー登山など度々行っており、自分はやりたいことをやっている。周囲から羨ましがられると、述べているので自覚としては勝者の脚本を持っているのかもしれない。しかし、現在イライラすることは？という質問に關して「夫ですね」と断言し、ほとんど一緒に食事もせず、話もしないとのこと。

自分の一番の失敗は彼と結婚したことと述べる等人間関係では勝者の脚本とは言えないようだ。対人関係面では、夫とうまくいかず現在夫の存在がイライラの要因、ストレスの要因となっていること、また、友人が多いと自負しているが、自分が一番、周りはビリとされていて、言いたいことを言うので周りもそういう人だと思っている」と述べる等本当に良い対人関係が構築されているかどうかは疑問であり、人間関係の面では両親との関係も含めて「敗者の脚本」としての面も強い。ただし、そうした人間関係を自覚しながら自分を保ってきていることが伺える。

好きな物語は「シンデレラ」：王子様が助けに来てくれる、嫌なことをリセットしてくれる、片っぱの靴さえあればと思った。それで人生の落とし前がつくと思った」とのこと、このことから自覚的には自分の人生は自己実現していると述べているが実際は余り快適な心安らぐものではないことが伺える。自分で頑張っているが誰かに救い出してもらいたい願望も現れている。

脚本のプロセスは、「決して・・・」脚本と考えられる。このテーマは「自分が本当に欲しいものは決して手に入れることはできない」と言われている。自分では気づかずに本当に欲しいものを得るために一歩踏み出すことが無い状態の脚本である。

ドライバーは急げ、強くあれと思われるが、普通は拮抗禁止令は親の意識した言語によるものによって形成されるが、B さんの場合は、自分の中で出来上がった可能性の方が高い。しかしこの脚本が現在の B さんの原動力になっていることは推測できる。

脚本分析のまとめ

脚本の構成要素として

禁止令は、「存在するな」「近づくな」であり、

拮抗禁止令は、「頑張れ」「しっかりしろ」

ドライバーは「急げ」「強くあれ」であろうか。

幼児決断による脚本信条は、「人は信用できない」「自分は強く生きる」「自立しよう」であり、

脚本のパターンは、仕事や社会的活動面では、「勝者の脚本」であり、自己実現できたと自覚している。対人関係面では、良い対人関係が構築されているかどうかは疑問であり、人間関係の面では「敗者の脚本」としての面も強い。

人生のモットー・座右の銘は、「人生は冒険だから一か八かやってみないとわからない」

好きな物語は「シンデレラ」：王子様が助けてくれる

脚本プロセスは、「決して～」脚本と考えられる。

以上の脚本分析から、Bさんは、「存在するな」「近づくな」の禁止令と「頑張れ」「しっかりやれ」の拮抗禁止令の複合的な影響とそれに対する反発から「人は信用できない」「自立しよう」の幼児決断をし、「誰にも負けない私」、「強い自分」として脚本を形成させたのであろう。しかし、それは自分では気づかずに無理に思い込もうとしたため「決して・・・」プロセス脚本となり、頑張った面では勝者の脚本であったが、本質的には、敗者の脚本も持っていることになる。

以上のことはバウムテストの解釈からも推測されるもので、意識的にはうまくやっている自分という自覚が強いが、無意識のレベルでは愛情飢餓感や満たされないものを強く持っていることが推測される。

では、そのような不安定な無意識の自己像、成育歴を持ちながら現在まで一応自覚的にも周囲から見ても元気に社会生活している要因はなにであろう

インタビューや言動から考えると、物事の捉え方であるように思われる。禁止令や拮抗禁止令を受け取っているものの、それに押しつぶされてしまわず、頑張っている力はある、意識レベルでも自分を一番に捉えようとする考え方が現在のBさんを形成しているようだ。さらに、現在も実際は周囲との問題があるにもかかわらず、それを自分のせいと考えない捉え方、深く向き合おうとしないことが表面的な元気の要因ではないかと考えられる。

このままこのスタイルで押し通して元気であることも否定はできないが、交流分析的に考えると夫や周囲の知人との関係など、自分の無意識の問題にも気づき脚本を書き直すことが本当に安定した快適な全体として自己実現した脚本

に沿った人生を送れることも考えられるのである。

事例3 Cさん 女性 80歳 専門学校校長

事例の概要

家族：夫（数年前に他界）、娘、息子 息子は別居

原家族：両親、5人姉妹の末女

S 県の有名な大きな商家で生まれたが、姉妹が多かったことや、母も家業を手伝っていたこともあり、婆やに養育された。家は来客も多く、外国人の来宅も多かったので母は忙しくほとんど手をかけてもらえなかった。そのこともあり、負い目だったのか母はとても優しく叱られたり、「～はいけない」とか「～しなさいと」言われたことは全くなかった。2歳の時、婆やが K 県に帰ることになり、どうしてもと言ってついて行った。K 県には母の姉の伯母がいて、そこに行くことになった。伯母には男の子しかいなかったのもとても可愛がってくれた。小学校5年まで伯母の家にて、夏休みに S 県の実家に帰ってそのまま伯母の所に帰ることができなかった。帰りたかったが何度頼んでも迎えに来てもらえなかった。すごくショックだった。

中学は姉妹の誰も行ったことがない N 県の学校に望んで行った。結婚していた長姉の家にはいたが、姉が亡くなってしまい、友人の家にお世話になった。

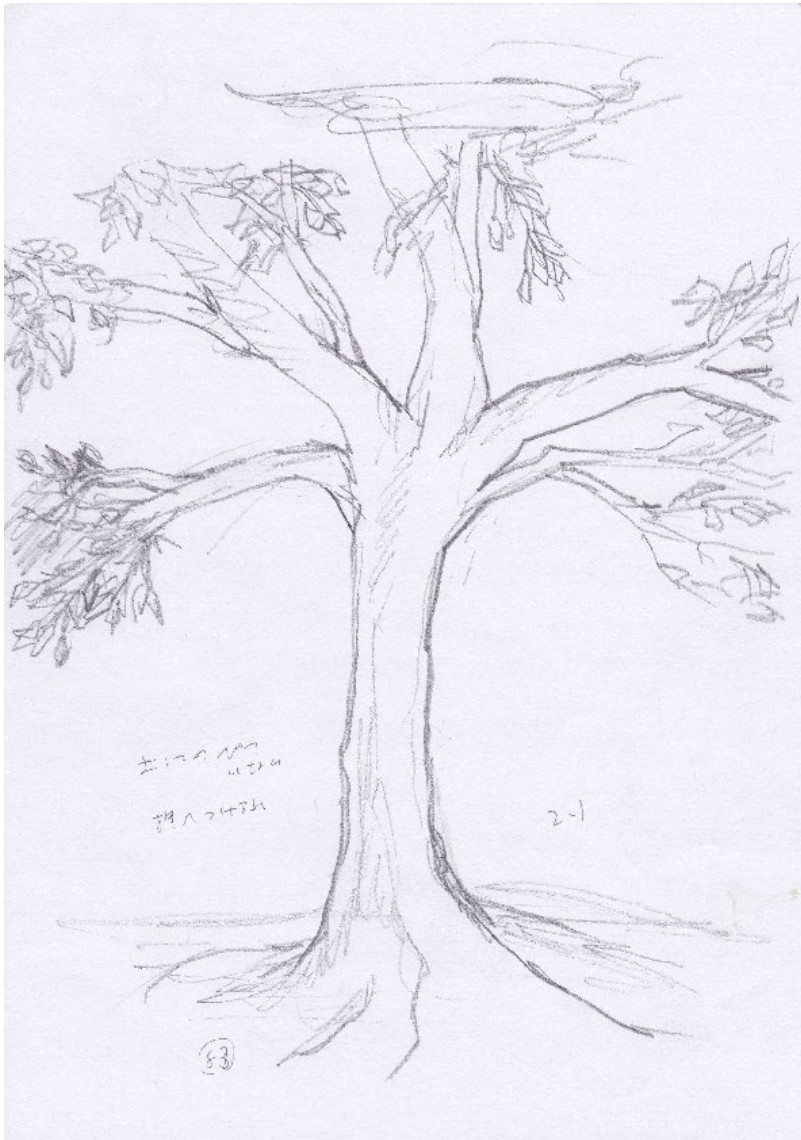
高校も別のキリスト教系の学校を希望してそこへ行き寮生活をした。大学は東京へ出てきて寮に入った。大学卒業後すぐに結婚した。姑にもとても可愛がってもらった。姑はいろいろな面で力のある人でいろいろ教えてもらった。姑が設立した専門学校を継いで、校長になった。現在多方面で活躍中。

70代のはじめに夫が他界。娘が現在一緒に仕事をしている。

SDS は、26 点でうつ傾向は無い、STAI は、状態不安 34 でⅢ領域、特性不安 31 でⅡ領域と不安傾向も見られない。

主観的幸福感、満足感 9、自信 6、達成感 8、失望感 9、至福感 11 で合計 43 と普通であるが今回の対象者の中ではやや低い。

バウムテスト得点は、35 点満点中 22 点、3 項目が 9 点とやや低めである。



Cさんのバウム

バウムテストの解釈

全体的印象としては大きい、やや不安定、抑えられた感じである。特徴としては、幹と比較して枝の太さ、ふくらみ、上部の押しつぶされた感じである。空間的側面としては、ほぼ真ん中に大きく描かれているが左右へのはみ出しが見られる。動態的側面として、筆圧はやや強く、ストロークは滑らかだが、描線にやや書き直しや強調が見られる。全体としてはエネルギーがあり、やや自己拡大傾向が見られる。

幹はやや傾き、でっぱりもあることから自我や感情の統制が優良とは言えない。枝に膨らみがあり、エネルギーや感情の鬱積が推察される。枝は左右に広がりを見せているが上部が途切れたように潰れている。社会との関わりを示す葉も多

く描かれているが垂れ下がっているものもあり、積極的にかかわろうとはしているが余り上手くいっていない面も感じられる。

根はしっかり張っていて無意識的、本能的エネルギーは充分であり、地面も描かれているので、現実検討力もあり、現実との関わりは良いと思われるが、抑圧感を感じていることが予測され、現実適応にやや困難さも感じているのかもしれない。

全体としてエネルギーもあり、外へ向かう力も備えているが、描画の中で目立つのは、上部の抑えられた描写であり。無意識の自己像は、エネルギーの強さや自己拡大欲求の存在の割には、どこかで抑圧を感じているか思い通りにできない事を感じていることが考えられ、伸び伸びしたものではないことが予想される。

脚本分析（インタビューから）

脚本の構成要素として、「存在するな」の禁止令がわずかだが考えられる。これはごく弱いもので、親が良かれとしたことであるが、母が忙しく手をかけてもらえなかったこと、折角、母の代わりの母の姉で顔が母そっくりだった伯母に母性を感じて安心していたが、大人たちの相談の結果、騙されて実家に帰らせられ見捨てられ不安を強く感じたことによるものである。夏休みに（実家へ）行って、また帰っておいでと甘い言葉に騙されて、一度帰りましたのよ。夏休みに。それが5年生の夏。それは真っ赤なウソで騙されたんです。夏休みが終わっても、だれも迎えに来ないし、手紙を書いても返事はこないし、それで、夢遊病みたいになっちゃって、人生第一のきつい体験で、最大のショックでつらい出来事だった。その他のことは伯母から強く言われたことはなく、息子しかいなかった伯母にはとても可愛がられた。いつもねんねこの中に居て近くに住んでいた叔父に笑われた。

拮抗禁止令は、伯母の躰としての「人の真ん中にいるものではない、謙虚に」というものであり、大人になっても自分から積極的に真ん中に出ることがいけない気がしている。何かの時に誰か大人が写真を撮ってくださった時にその写真の真ん中に私がおりましたね。私は何とも思わないで「私が真ん中にいる」と言ったんですね。そうしたらすごく怒られて「自分がいつも真ん中にいるとか、真ん中に居なくちゃいけないとか思っではいけませんと。

この拮抗禁止令が大人になっていろいろ業績を残している力のある存在にもかかわらず、謙虚である要因なのかもしれない。また、人の先に出ることができないとのこと。人を押しのけて一番で行こうという意思と力は私にはないんです。残念ながら。中略 もっと積極的にした方がいいんだろうなって思うんですよ。きっとやり手さんだったらこうなさるんだろうなと思うんですよ。でも私はいつかこの辺でと思います。

私はまだ、人様に申し上げられない事がいっぱいございますのよ。ですからね、そういうことに対してもできるだけのことを努力しながら耐えて切り開いていかなきゃ仕方ありませんね。

以上の発言から、基本的構えは、自己肯定、他者肯定である部分もあるが、時によって自己否定、他者肯定を示すこともある。

幼児決断は、「大人は信用できない」であり、「自分のことは自分で決める」「人を押しのけない」であろうか。

脚本のパターンは、仕事の面、社会的対人関係では「勝者の脚本」を持っていると考えられる。しかし、子ども時代の大人に裏切られた思いや居場所が不安定であり、いつも何かに抑圧されている感もあり、敗者とは言えないがいまいちな感も持っている。人には言えない事がいっぱいあるという発言から私的対人関係が私生活上で今一つ充実感の無い思いをしていることも推察される。

座右の銘は「人間万事塞翁が馬」何がどうなるかわかりませんものね。この世の中。だから、まあ、運は天にお任せしないと仕方ありませんね。

小学校の時、学校の代表で歌のコンクールに出て優勝した。その賞状をもって学校へ行ったら、その賞状を同級生の女の子に下に落とされて踏まれた。

それが第二のつらい経験だった。家に帰って病気で寝ていた姉の布団のところで泣いていた。数日後に担任の先生がみえて「こまい、こまい、そういうことは取るに足らない」っておっしゃったんですね。方言で「ちっさい、ちっさい」で、何かあると私は「こまい、こまい」と思うようになりましたね。そういうことって私は乗り越えました。

かなりつらい体験をしたが乗り越えたことなどが座右の銘の所以であろう。いろいろなことがあるが、それは変わるし、仕方のないことというのが人生のスタンズになっているのかもしれない。

好きな物語、印象に残っているお話しは、伯母の所に居る時に伯母の長男のお嫁さんが寝る時にお話しをしてくれた。優しい口調で、何のお話しだったかはもう忘れた。お魚とか竜宮城式の空想の世界のような気がする。

今、好きなお話は、「花咲か爺さん」花を咲かせるのが好きで、花を咲かせるのってどんなにか楽しいなど思いますね。だから花咲か爺さんで行く

幸運なことが起こり、自分の手で人も喜ぶような成果を上げたいという思があるのかもしれない。

もしタイムマシンで戻るとしたらという質問には中学時代が楽しかったが、小さい頃には戻りたくないとのこと。中学は長崎の姉の家だったが、姉が出産で母子共に亡くなり、友人の家にお世話になっていた。その時親友と 5 人の男の子（親友の兄弟）と一緒にいた時が一番楽しかったとのこと。

姉の看病をしなくちゃならなかったり、義兄が苦しい思いをして、きつい人生を

送って、幼い自分がどうもできないというのが苦しいですね。姉が亡くなり、そのこともとてもつらい体験でした。

でも大体自分は恵まれていた。つらい思いをしたのも恵まれた中でのこと、いろいろ思い出もついているので全部ためになっていたと思うとのこと。

現在の年齢（高齢）になって自分にとっての人生は、やっぱり悔い多き人生ですよ。それぞれのところでもうちょっとああすればよかった、こうすれば良かったと思わないわけではありません。悔いたってしょうがないと思っています。

と最後には仕方がないという、受容か諦めあるいはポジティブな捉え方へもって行く。

脚本のまとめ

脚本の構成要素

禁止令：ごく弱いものだが、「存在するな」

拮抗禁止令：自分が自分がと出てはいけない

幼児決断：自分のことは自分で決める

基本的構え：自己肯定、少し自己否定を含む

脚本パターン：ほぼ「勝者の脚本」だが「敗者の脚本」も時々出現する

好きな物語：花咲か爺さん

脚本プロセス：「～までは」脚本

以上のバウムと脚本から、

エネルギーや力もあるが、無意識の自己像として、鬱屈した面、抑圧された面が推察され、伸び伸びと力を発揮することに罪悪感があるのか「積極的にアグレッシブ（行動的という意味）に物事にあたることに躊躇してしまう面がある。そのことで不満感を抱えている可能性もある。しかし、幼児期に可愛がられたことで、物事をポジティブに捉えることが元気でいる要因ではないだろうか。また、仕方がないこととしての捉え方、諦観か、良い方へ転換するという考え方、状況の受容、などが現在の活動的な生活を支えているとも考えられる。

事例4 Dさん 67歳 女性 主婦

事例の概要

家族：夫と息子、娘の4人だが、子どもたちは結婚して独立。

原家族：両親、兄、弟、父方の祖母と同居

幼児期から母親に「何をしても長続きしない」「何をしてもダメだ」と言われてきた。反発はせず、そうなのかと思っていた。自信も無かった。また、友人や他の人と比べられ、ダメな子だと言われていた。それがとても嫌だった。自分が親になった時は絶対そうしないようにしようと思っていた。子ども時代は自信も無く、高校の時に担任から「もっと自信を持ちなさい」と言われた。母はやることにも一貫性が無く兄弟それぞれにお互いの悪口を言ったりしていた。父は立派な人で尊敬していた。父は勤め人だったが、真面目で良く働き、何かで援助されたりしたことには感謝し、恩返しをする人だった。父からは、人の恩には報いなければいけない。そのためには一生懸命頑張るということを学んだ。同居していた祖母からは可愛がられた。母と祖母は合わないようだったが、父が間に入っただのと、母があっけらかんとしている人だったので大きな問題はなかった。そういう所から人と適当に上手くやるということを学んだ。結婚するまでは、自己主張することもなく消極的な性格だった。

結婚は、相手が自営業であることで親からは反対されたが結婚した。夫はわがままな人で、なんでも人任せなので、従業員との関わりなどしなければならず、だんだん積極的になった。現在は言うべきことはいくつになり、上手くやっていると。娘が一度離婚してその時うつになり、その時は自分も混乱して泥沼だったが、その後娘が再婚しておちついたので、自分もおちついた。

SDS は、35 点でうつ傾向はない、STAI は、状態不安 36 でⅢ領域、特性不安 32 でⅢ領域、と不安は示されていない。

主観的幸福感、満足感 10、自信 11、達成感 7、失望感 8、至福感 11 で合計 47。

バウムテストの評価得点は 13 点（35 点満点）、3 項目の得点は 6 点とかなり低い。

バウムテストの解釈

全体印象は、寂しげ、力が無い、生き生きしていない、不安定、疲れている、不安な感じ。

特徴 幹が曲がっている。先端だけでなく途中も凸凹している（特に幹の右側）。幹は横に伸びているがやはり凸凹していて線が途切れている個所もある。

空間的側面では、画面の中心に描かれているがやや下よりで上部が空いている。自信の欠如や劣等感が示されている。

筆圧はやや弱く、ストロークは切れ切れで、自信の無さや不安感が感じられる。実は他の部分より少し強めに描かれている。

根は特に描かれていない。地面は描かれているがやや波打っている。

内容的に見ていくと、細い、蛇行している幹から自我統制の悪さやエネルギーの無さが推察できる。また、幹の凸凹した膨らみからエネルギーや感情の鬱積があることも予想される。頼りな気な枝ぶりからは社会とのやり取りが余りうまくいっていない事が示されている。実は他より強く書かれている。実の書き方から求めるもの（目標・名声・成果など）はありそうであり、少しだが葉も書かれていることから社会へ関わりたい欲求は感じられる。落ちている葉は比較的大きく、挫折感、敗北感あるいは喪失感が大きいことが予想される。根は書かれていない、地面は描かれているが薄く、少し波打っている。根の部分と地面の接点は現実との関わり方を示すと言われ、現実は本人にとってやや厳しいものであり、関わりはそれほど良くはないかもしれない。

総合的解釈

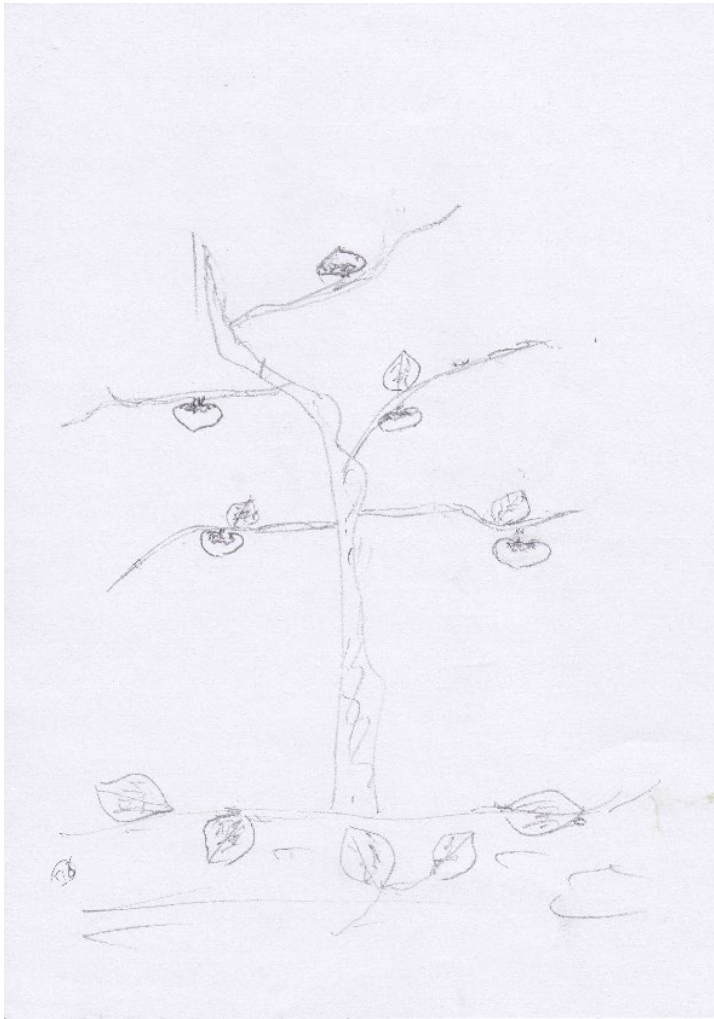
全体として、生気のない、寂しい感じで不安気な力のない木から、自信が無く、気力もない自己像が感じられ、根も書かれていない事や蛇行した細い幹から内的エネルギーが乏しく、挫折感や敗北感を強く感じていると思われる。社会とは関わりたい欲求はあるがあまり生き活きと関わっていない自己を感じ取っているのではないかと予想される。

日常生活では適応的に過ごしているようだが、無意識の自己像はかなり弱々しく、力のない、対人関係でも鬱積感をもったものであることが考えられる。

脚本分析（インタビュー結果）

脚本の構成要素としては、禁止令は、母からの「成功するな」と「おまえはダメな子」という属性に関する禁止令が考えられる。幼児期から母親から「何をしてもし長続きしない」「ダメな子だ」と言われてきた。インタビューでは、**何をやっても続かない、結構ダメっていう感じで育っている。「何をやっても続かないね」「だめだね」とか言われたことが多かった。ボーっとしていた子なので、それに対して傷つくとかそういうことは無かった。ただ、嫌だになっていうね。親に言われるとそうなのかなと思って自信が無かった。**と、繰り返し述べている。

基本的構えは、「自己否定、他者肯定」I am not OK You are OK.)と考えられる。



D さんのバウムテスト

拮抗禁止令としては、父の「人の恩に報いるために頑張らなければならない」であろう。父から異常に影響を受けて、父は苦勞した話をしてくれて、恩人には何かそのために一生懸命働いて、昔の人は偉くなったんです

幼児決断は、「自分は力のない人間だ」「なにをやってもダメだ」であろう。

ただ自分としては、ボーっとしていたので子どもの頃に考えたことはない。

今は愚痴・泣き言は言わないかな。とのこと。いまの自分の性格は、面倒見も良いし、変な世話好きなところが、人を恩を絶対どんなことがあっても、お世話になった事は忘れないから、結婚するまでは、どこかに自信がないから全て積極的に行き出せないって言う「自分が」って、主張することがなかった。感受性は強くて、いろいろ感じてはいたけど自分の中でコントロールするタイプだった。夫は相談しても勝手にやれというタイプなのでやるしかないので変わったと思う。

脚本のパターンは、幼児期の母親からの禁止令によって自己否定的な構えから

「敗者の脚本」を描いていたことが予想される。しかし、結婚後の環境の変化からやや積極的に自分を出せるようになり「勝者の脚本」として自己実現するには至らないが「勝てない脚本（平凡な脚本とも称される）」へと変わってきていることが予想される。しかし、人と適当にうまくやろうとしているなど、決して生き生き充実したものではないと推察される。

座右の銘は「七転び八起き」苦労があるけど、そこから立ち直ってというのが人生だと、とのこと。自覚的には、自分の人生をかなり良いものと捉えているが実際はかなり苦労があったと感じているのであろう。

好きな物語は、バレエの「くるみ割り人形」で、可愛らしくて楽しいところが好きとのこと。現実逃避的な面で自己を安定させたいとの思いがあると予想される。

脚本プロセスは、「七転び八起き」が座右の銘としていることや、実際にかかなりの年齢になってからも、長女が離婚することでうつになり死にたいということに対応したりで、「泥沼だった」というように大変な思いをしたことなど苦労が多く、何とかそれを乗り越えたということからも「いつも～」脚本（「どうして自分にはいつもこんなことが起こるんだろう」というプロセス脚本）を持っていると考えられる。

以上の脚本分析から、「成功するな」「ダメな子」という禁止令に反発できず受け入れてきた。拮抗禁止令の「恩に報いるために頑張る」はかなり現在までの人のために頑張る、人の面倒を見ることなどに影響している。禁止令の影響は大きく、今は生活状況から積極的になっているとのことだが、無意識の自己像は、自信が無く、消極的で自我統制力も弱い。禁止令によって自我がかなり傷ついていることが予想される。現在頑張っているのは、何とか自分を合理化して現在の生活に合わせているからであろうと推察されるが、内面はかなり我慢をされていてつらいのではないかとと思われる。現在元気で一応社会参加できているのは、自分が積極的に頑張らねばという意識と拮抗禁止令による、人のために役立つようにしなければという使命感の強さからではないかと考えられる。無意識の自己像から見るとかなり意識的に無理をしているのではないだろうか。

事例5 Eさん 72歳 男性 元建築会社勤務 1級級建築士

事例の概要

家族：妻と娘2人（2人共結婚して別居・孫2人）

原家族：両親と妹2人の5人家族、両親は既に他界

自覚的性格は、大雑把で余り細かいことはダメ。しつこく理詰めで来られるとキレル。責任感は強くて、やるときはやるが長続きしない。飽きっぽいとのこと。

父親はのんき坊主で余り稼ぎが無く、母にごちゃごちゃ言われていた。

自分は、小さい頃から遊ぶことが好きで高校も大学も部活やって勉強はできなかった。大学は一度落ちたが、志望校に入学し働きながら国家試験をとった。

父は反面教師で、自分は大きくなったら働いて家に金だけは入れないといけな
いと思っていた。

母は結構教育熱心だったので家計が大変だったのに、行きたいというと英語の塾に行かせてくれたこともあった。

大学卒業後建築会社に勤務。海外で建築施工をかなり長いことしていた。米国の西海岸と特にビルマが長かった。60歳の定年まで勤めてそれ以降は別の会社で建築の調査の仕事をしていた。現在は仕事はしていない。現在は政治に関心があり、保守系だが、いろいろな政治集会やデモなどに参加している。

SDS 47で50以下ではあるがややうつ傾向がある。STAI 状態不安 36Ⅲ領域、特性不安 48Ⅳ領域で特性不安はやや高い。

主観的幸福感、満足感 11、自信 10、達成感 9、失望感 8、至福感 9で合計 47点。

バウムテスト評価得点は、23点（35点満点）と3項目は11点で普通で余り高くはない。

バウムテストの解釈

全体的印象としては普通。特徴は地面に食い込むような固い感じの根。空間的側面としては画面のほぼ中央にバランスよく描かれているが幹が右へやや傾き幹に傷のような描き込みがあり、自己拡大欲求はあるものの傷つきやすさを感じられる。筆圧は弱くはなく、ストロークも問題ないが、幹の上部と枝に所々ふくらみがあり、エネルギーや感情の鬱積が推察される。枝は上左右へ伸びて葉も丁寧に描かれ社会とのかかわりはある程度うまく行っているようだが、左側の枝の多くは沢山ある実の重さのためか下がっている。目標や成果は充分であるが、ややプレッシャーを感じているか、敗北感、諦めがあるのかもしれない。根はしっかりと地面に食い込むように描かれ、現実と何とか適切にかかわっていると思われるが、地面は左右で段差があり、凸凹していることから現実とうまく適応

するのにやや困難を感じているのかもしれない。力はあるが無意識の自己像は本人が自覚しているより伸び伸びしたものではない可能性がある。



Eさんのバウムテスト

脚本分析（インタビューから）

脚本の構成要素としては、禁止令ははっきりしたものはない。しかし父親のモデルとしての姿から無言のメッセージとして「成功するな」があったかもしれない。父親がダラダラした無責任な生活をするを引き合いにして自分も似ているかもしれないとコメントしている。親父はのんき坊主で余り稼ぎが少ないときも、鼻歌うたってふらふらして母にごちゃごちゃ言われていた。余り堪えたよう

な感じもしない。(自分が大雑把で、きちんとならないのは) そんな性格から来ている気がする。しかし、同時に父は反面教師で生活費を稼げなくて、ぶらぶらしていたので母が苦勞していたのを見ているので、「これはまずいな、大きくなったら稼いで金だけは家に入れないといけない」というのは思っていた。その辺では、父と比べれば責任感はある。とのことで禁止令をそのまま受け入れてはいない。

拮抗禁止令として「妹を守れ」というのは言われていたので、頑張って母や妹を守らなければと思っていた。両親からの影響は、親父からは、「愚痴を言わない、笑ってごまかす」ということですかね。親父はあまり深刻に考えない。お袋は責任感が強い人で責任は果たす、やると言ったらやる人。

責任感の強さとか自分に厳しくとかは言われていた。母からの拮抗禁止令は「責任感をもつ」と「自分に厳しく」であったと考えられる。母は結構教育熱心で行きたいというと無理をして塾に行かせてくれたりしていた。

基本的構えとしては、自己否定、他者肯定の部分もあるが、徐々に自己肯定の部分が増えてきたと言えそう。

幼児決断による脚本信条としては、「働いて稼ぐ」「家族を守る」であろう。

脚本のパターンは、一応「勝者の脚本」であろう。

座右の銘は、「一灯照隅」で個人の力は知れているので、万の灯りが集まると国を照らせるという教え。ひとりが役割を果たすと、それが大きな力になるということ。今のところそれが一番気楽でいいかなって。

好きな物語は「小鹿物語」悲しいお話だと思うが、少年の成長の物語で全くの悲劇でもない。とのことでつらさを乗り越えて立ち直るということに共感があるようである。

ストレス状況では、ちょっと休むのが対処法。それからまた、やる。若い頃も今も同じ。

幼児期で印象的なのは葉山に疎開していて海が大好きで、泣いていても砂浜にほっぱり出すとペタペタ歩きながらニコニコ笑っていたらしい。とのことで、母親と一緒にいたようで、母子関係は良いものであったことが伺われる。

これから先、死についてなどは、崖にむかってあるいているようなものでズドンと落ちこちるみたいな感じ。でも余り根がそういうことは考えない方。方向はよくわかっているつもりなんだけど。そこまで行くので間際まで元気で居たいなど。

自分のこれまでの人生は、良い時代にいられたと思うし、ま、良かったと思う。今は孫2人の「良い爺」の役割で良いのかな。

脚本のまとめとして、特にネガティブな脚本を形成するような禁止令は受けていないし、また、受け取ってもいない。拮抗禁止令はそれによって身動きできない

いようなことは無く、活躍するモチベーションになっていたと思われる。自分の分をわきまえることと自分の力でできることはワーストと力を尽くしてやり、後はダラーっと休む（本人はライオンのようなのだという）というパターンで上手く乗り越えてきているようだ。力もあるため元気でやるべきことをやれているが、無意識の自己像としては目標や成果が少しプレッシャーになっている面があるかもしれない。また、かなりの傷つき易さもあり不安や落ち込み（うつ得点や不安尺度から）なども無いわけではないことが推察される。しかし、自覚的に自分で頑張ればやれるという思いも強く、深く考えないように上手く躲すことを心がけていることが元気な要因かと思われる。

事例6 Fさん 76歳 男性 建築家 大手建築会社の研究所に勤務

事例の概要

家族: 妻 73歳、長女 42歳

原家族: 両親、7人兄弟の4番目

両親とも音楽家で、兄弟もほとんどが何かしら芸術的なことをしている。

父から、みんなが芸術家では戦争になった時に困るからお前は別の事をやれと言われて建築家になった。進路では父親の影響を受けたが、直接は兄や兄の友人から影響を受けた。兄弟が多く煩いので食事の時なども「喋るな」と言われていた。性格は父に似て明るい、それも父に似て神経質なところもある。母は別に悪いところはないが、子供は大勢いるし忙しかったので構ってもらったことはないし話をした記憶もない。むしろ忙しくてかわいそうだなと思っていた。食事は美味しかった。家の中では「これはしてはいけないとかこうしなければいけない」ということは無かった。そのせいか、自分では、明るい方のことしかやらなかった。困った時にはそれは置いておいて別の問題に取り組む対処法をしていた、困った事は仕事関係が多いのでいろんな人に助けてもらった。ストレスは受け入れるか終わるのを待つ、そうやって過ごしてきた。

余り困った事が無く、大学卒業後に入った建築会社を定年になり、今また専門のことで頼まれ仕事をしている。余り深く考えない。

結構楽しい人生だと思っている。

SDS は、35 点でうつ傾向はない。STAI は、状態不安が 33 でⅢ領域、特性不安が 29 でⅡ領域と不安傾向もない。

主観的幸福感、満足感 10、自信 9、達成感 9、失望感 8、至福感 9 で合計 45 点。

バウムの評価得点は 18 点 (35 点満点)、3 項目が 9 点とやや低い。



Fさんのバウムテスト

バウムテストの解釈

全体の印象は弱々しく、消えそうな感じ。特徴はサイズの小ささと筆圧の弱さ。空間的側面をみると画面のほぼ中央に描かれているが、サイズが小さく下よりである。幹も非常に細く、木全体に生気があまり無い。自己縮小感、自信の欠如や自我統制力の弱さを感じられる。樹冠は他と比べて大きめだがストロークが雑で枝は無く、防衛的な面も感じられる。地面は描かれているが、根は無く、細い幹が不安定に地面に接していて、現実とのかかわりに多少の不安感があるのではないかと考えられる。また、内的エネルギーの乏しさも示されている。樹冠の中に実らしき描き込みもあるが、不鮮明であり、成果を得ている確信がないのかもしれない。枝は描かれておらず、社会との関わりを積極的に望んでいるようには見えない。

無意識の自己像は力のない自己縮小感を持った弱々しいものであることが推察

され、防衛的で自己を伸び伸び発揮することができていないと自分で感じているだろうことが考えられる。

脚本分析（インタビューから）

脚本の構成要素としては禁止令らしきものはインタビューからは特に把握できなかった。敢えて言えば、食事時などに「喋るな」と父からよく言われていたようで、「お前であるな」の禁止令があったかもしれない。拮抗禁止令も特に把握できなかった。兄弟が多かったので両親とも余り子どもに何かを伝えるということは無かったのか、良い意味で放任（自由に）されていたので親の影響は大きくはないことが予測される。「～してはいけない」とか「～しなさい」と言われた覚えがない。外部からの刺激はよくも悪くも少なく、生活上の制限が無かったため、余り深くものごとに係ることは無かった。基本的構えでは、はっきりした自他の肯定も否定もなかった。

母は特別悪いところはないし、あんまり・・・話をしたという所はないですね。お袋と相談することは、私自身はやっても意味がないと思うし、兄弟もそう思っていたんじゃないかな。なんでもありですよ、家の中は、兄弟大勢で忙しいお母さん。われわれの面倒なんか見る時間がない。大勢いるからかわいそうだなって。覚えていないんですね。すごく怒られたことがない。

終戦後だから、生活が大変で、子どものことなんて面倒見ていられないって言うのがあたっていると思いますけどね。

従って、幼児決断による脚本信条も語られなかった。子どもの頃のことは親のことも含めて余り覚えていないとのこと。インタビューでは語られることはなかったが、親からあまりかかわりを持たれなかったので、幼児決断としては「親は忙しいから、要求はしない」「自分で楽しいことをしよう」といった考えがあったのだと推察される。状況の受容というか自分に言いきかせているという感じが強い。ただし、本心ではもっと手をかけてもらいたかったというのはあるかもしれない。バウムでの自己像の自信や確信のなさなどはそのような状況形成されたものかもしれない。

子どもの頃困った時の対処は？

余り困ったことが無い。困ったらやめて別の事をする。大人になってからは、いろんな人に相談して助けてもらう。余りくよくよしない。ストレスはなくす方向で行く。でもストレスになることはある程度まではお付き合いするしかない。幼児期のことは思い出せない。タイムマシーンに乗って遡っても 23 歳か 24 歳位の事へ行く程度。家族ではなく研究所の仲間とのことはなつかしい。

今の年齢や役割については、昔ならね、こんな年齢まで生きているってことはいないので、今はおまけで生きている感じ。昔は妻と娘を養っていかなければならな

かったが今は役割はないんじゃないかな。

座右の銘も特になかった。

印象的な物語も特になく、歌で「案山子の歌」というのが発想は面白いとは思うとのことだった。案山子は、「じっと立っている」、「動けない」、「感情が無い（あるいは出せない）」、「生気がない」等、余り生き生き、伸び伸びした印象はないが、もしかすると自己を投影しているのかもしれない。バウムに示された自己像と共通するものがあるようである。

以上の脚本から、成育歴に問題はみいだされなかった。特徴としては何かに深く関わったり見極めたりする機会もないまま問題なく成長したことが考えられる。そのため無意識の自己像がやや縮小的であるにも関わらず、それが実生活に影響はしていない。おとなになってからも問題に直面することが仕事以外は無く、仕事は仲間内で解決できたとのこと。ある意味で恵まれた環境であった事が予想される。兄弟が多かったことと時代的なことで親の干渉が少なく、自由であったことが良い結果をもたらしたと考えられる。バウムに示される無意識の自己像はかなり問題がありそうだが、深く考えない事、現況の受容、自分を納得させることなどが元気の要因なのかもしれない。

事例7 Gさん 73歳 女性 主婦

事例の概要

家族：夫 78 歳、長女 44 歳（海外で一人暮らし）、現在は夫と 2 人暮らし

原家族：両親、兄 2 人、高校生まで父方の祖母が同居。父は 60 歳で他界、母は 84 歳で他界

専門学校卒業後、商社に勤務。楽しく勤務していた。2 年で退職。大阪万博のコンパニオンなどアルバイトをしていた。28 歳時お見合い結婚。出産。30 歳ごろからタイプの技術を生かしてパートで商社に勤務。子どもの成長と共にパートの日数は増えていたが、55 歳で人員削減もあり退職。その後知人の洋装店の店長として 2 年間勤務したが、親会社の倒産で退職。それ以降は専業主婦。習い事等積極的に増やし、ある程度の成果を上げている。友人や知人とのコミュニケーションは良く外部との関わりは多い。以前は言いたいことを言う自己主張型で人とうまく行かないこともあったが、年齢と共に我慢するようになった。

日常生活は楽しくやっているが、専門職などのもっと重要な仕事があった、そのためにもっと勉強しておけば良かったと悔やむことや折角やっていた仕事も会社の都合や倒産などで中断されてしまったと 70 歳位までは現状に何となく不満や違和感を持っていた。現在は現状を受け入れている。

SDS は 34 でうつ状態はない、STAI は、状態不安 32Ⅲ領域、特性不安 31Ⅱ領域で不安傾向もない。

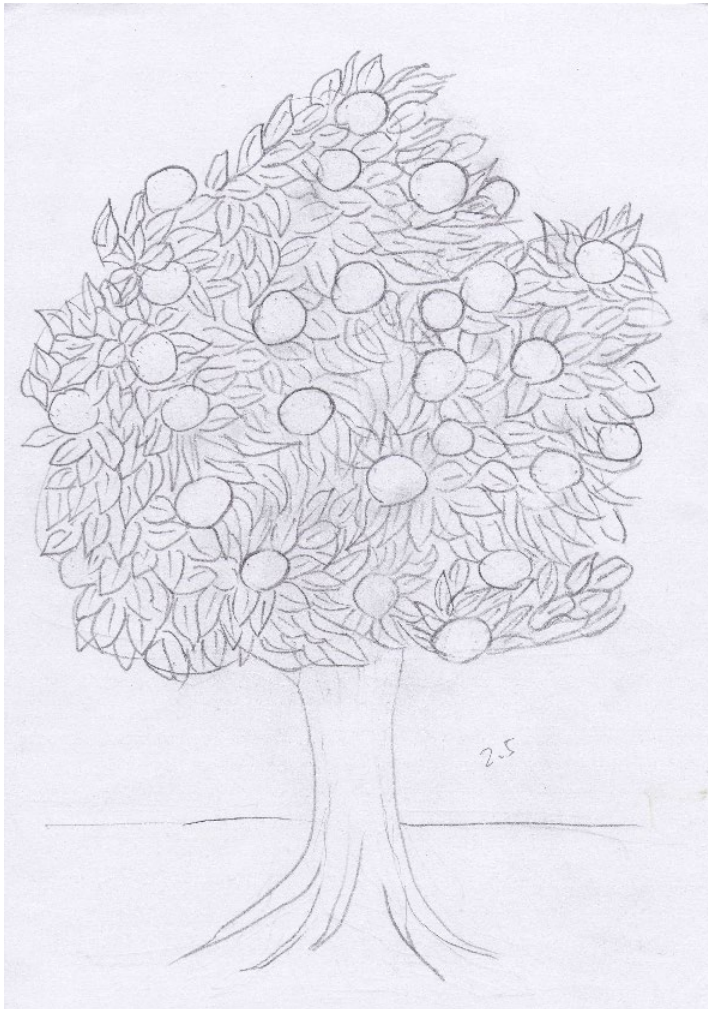
主観的幸福感満足感 10、自信 10、達成感 9、失望感 8、至福感 9 で合計 46。バウムテスト評価得点は 27 点（35 点満点）、3 項目は 11 点と普通である。

バウムテストの解釈は

全体印象は、堂々としている、動きがある、少し不安定。特徴としては樹冠が大きい、実も多く多い。空間的側面は、画面の中央に大きく描かれていてエネルギーが感じられる。樹冠が比較的大きく丁寧に描かれているのに比べて幹の筆圧やストロークがやや弱く、知的なことへの親和性は持つが自我の統制力、感情の統制力はやや弱いかもしれない。葉は丁寧にしっかりと描かれていて強迫的ではないが几帳面さが伺える。また、社会に直接触れる葉がしっかりと描かれていることから社会とのふれあいも求めている、対人関係を含め社会との関わりは概ねうまく行っていると思われる。しかし枝が樹冠でおおわれているとは言え全く描かれていない事から、しっかりと外部へ働きかけ外部からの刺激を受け取る、問題に直面するという外面を飾ることで避けていることも考えられる。実は多くしっかりと描かれていて目標は沢山あり、成果を望んでいる可能性がある。しかし、実際の能力より求めることが強く、自己拡大欲求や自己顕示

欲なども示されている。根や地面もある程度しっかり描かれているが根の描き方が樹冠と比べて少し弱く幹が下部の方が細い等不安定さも多少ある。現実検討は悪くなく現実との関わりも適応的ではあると推察される。

無意識の自己像は、理性的・知的でありたい思いや自己顕示欲が強く、実際の能力より欲求が強い傾向がある。外面を良く見せたい割に自我が弱く、少し不安定さが見られる。しかし、概ねは適応的で問題はないと予想される。



Sさんのバウムテスト

脚本分析（インタビューから）

脚本の構成要素としての禁止令はほとんどない。父も母もほとんど褒めず、あなたが悪いということが多かったが、それでひがむことは無く、根本的に愛されているという自信があった。母には、友達と喧嘩して、「何とかちゃんはどうの」

っていった。絶対に私が正しいと思っても、毎回「あなたが悪い」って必ず言われたの。父は、通信簿の生活状況に「わがママがややあります」と書かれていた返事に「我が家でもその通りです」と書いていた。その時に心で思ったことは、「うん、我が子に限っても庇わないね、この人は、何かあったら自分のことは自分で守らなくちゃ」ってどこかで思ったね。

基本的構えとして自己否定はすこしあったが、自分で何とかするということで自己否定感に落ち込んでいない。その要因として同居していた祖母が可愛がってくれて、「そんなことはないわよ」と言ってくれた。拮抗禁止令としては、母から「きちんとしなさい」、父から「仕事はきちんとしなさい」といわれ、「真面目に生きる」というのは父の生活態度から伝えられた。

父は黙って本を読んでいるような人で怖かった。兄や従弟たちも怖いといっていたが、昔のお父さんで、祖母や母がお父さんは偉い人だからと口答えもしなかったからだと思う。他の人は口答えはしなかったが、唯一、自分が口答えをしていた気がする。母は穏やかで優しい人で小さい時に両親を亡くして叔父の家で育ったので、遠慮深く周囲に気を遣う人だった。祖母にも気を遣っていた。子どもの頃友達との喧嘩等で嫌なことがあって「あなたが悪い」と言われて「お母さんはそう思うのね」という感じだったが、ごはんを食べて寝るとすぐに忘れてしまっていた。今となっては、そこに問題があると思うんだけど。そこに反省もないわけだから、もっと、なぜいけないと言われたのか「あれかな、これかな」と考えないから。今に至ったと最近気が付いた。

自分としては、ポイントは余り考えないんですよ、両親についても「私のことをどう思っているかしら」なんて全然考えないですよ。好かれているのは前提として持っていた。何でもあんまり考えないということは一番正しいんですね。

幼児決断による脚本信条としては、「自分のことは自分で守る」「深く考えないのが一番」であろうか。

脚本のパターンは、「平凡な脚本（勝てない脚本）」が考えられる。人生を振り返っても特別に困難に出会ったことも少なく、何とか過ごしてきているので問題ないが、充実感を持った、自己実現したという感覚は持っていない、むしろ何もなかったのが幅がでなかった。深く取り組まなかったから成長しなかったという思いは強い。普通に過ごしてきたが、今になってまずったなと思いますね。仕事についても、もっと勉強して専門職につきたかった。大学に行けないわけではなかったが、父が専門学校を勧めたので深く考えずにそうした。反発するという気も無かった。その後の仕事も時代の不況で人員削減になり何となく退職したし、洋装店は親会社の倒産でやめることになった。何となくそうした環境も自分のせいだけではなく満足のいくものではなかった。今にして思うとそこそこうまくやってきたとは思っているようで、確実に自己実現したという思いはな

いが、子どもの頃から普通の家で普通に育ったとの認識も強く「平凡は脚本」を持っていると言えるだろう。

座右の銘というか信条は、「お金で買えないものが一番素敵」と思っている。愛とかも絶対そうじゃないですか。時間もそうだし。お金で買えないものをもっと大事にしてきたかったな。というのが今の感想ですかね。時っていうのが特にそうで、長い時間を無駄にしてきたかなと、(中略)ある意味後悔も含めつつ、お金で買えないものが一番素敵だなと。

印象的なお話は特に思い当たらないが、小さい時には、夜寝る時、よく話をしてくれましたね。なんか「まだまだぷっぷっ、まだぷっぷっ」というのを覚えていますね。音が面白かったんですね。とのことで投影するのは面白い、楽しい自己像なのだろうか。余り困った問題に直面したことは無いが、何か問題が起こった時の対処は、子どもの頃は何もしないで母や兄に助けてもらっていた。大人になってからは、できることはやって後はお任せするということで乗り切ってきた。今の年齢については、「仕方ないな」という気持ち。大体あきらめて暮らしている。すっかりあきらめてはいないが。今は夫と 2 人なので健康に気を付けて過ごしている。私は名もなき 1 人じゃない？自分は何も残せなかったというのが残念。ちょっと悔しかったかなと思いますね。今の年で思うのはそのくらい。楽に迷惑かけずにフェードアウトできたら良いなと思います。人生全体を考えると私が一本大きく貫いているのは”こんなもんかな”とそれしかない。上等上等こんなもんか。

以上の脚本分析から、両親からの愛情も感じていて、成育歴に問題はみいだされなかった。特徴として何かに深く関わったり、考えたり見極めたりすることは無く問題なく成育したことが考えられる。やや自己拡大傾向や自己顕示欲、自己愛的な面が無くはないが、概ねうまく過ごしてきたようである。しかし、随所に、少し残念なこととして自己実現ができなかった思いがあり、「勝てない(平凡な)脚本」であることが推察される。何年か前まではそれが強くあり、こんな筈ではないという思いが不満足感になっていたが、現在はそれも達観しているようで安定している。状況の受容がなされているようで、それが、元気でいる要因となっていると考えられる。

事例8 Hさん、71歳 男性 会社顧問

事例の概要

現在は、妻と長男の3人暮らし、長女は45歳で結婚して別に暮らしている。長男は42歳、2年前に離婚して戻ってきている

原家族は、両親と兄2人、姉3人、妹1人とHさんの7人兄弟でHさんは下から2番目。

F県で出生。大学でK県に行くまではそのまま在住。

幼児期から、親に叱られるより兄や姉に叱られることが多かった。親は放任主義だった。兄や姉からよく言われたことは「人に嘘をつくな」とか「だますな」とかだった。

自分の性格は、依頼心が強くてわがまま、やんちゃなところがあった。いつも兄や姉に頼って助けてもらって育った。兄姉がよく勉強をしていたので自分も自然に勉強をしていた。小学校ではガキ大将だった。四月生まれでもあり、兄姉が上にいたので、周りが馬鹿にみえた。自分が一番力があると思っていた。鼻持ちならない子供だったかもしれない。高校に入って優秀な友人が周りにいたので自信がなくなった。兄や姉は高校までで大学には行っていないが、「行きたいよね」と確認されて、「行きたい」と言ったら、国立なら良いと条件つきで大学に行かせてもらった。大学卒業後東京で就職。28時に引き抜きでK県に。それ以降K県に在住。

仕事を始めてペーペーの頃は子供の頃兄や姉に頼っていたように上司に頼っていた。自分がこの人より超えたなと思った時から変わった。

会社を定年になってからは会社の相談役のようなことを少しと地域の役職をやったりしている。ほとんどこれといったことはしていないが、友人と会ったりして楽しんでいる。

SDSは、23点、STAIは、状態不安31Ⅱ領域、特性不安28Ⅱ領域で不安は示されていない。

主観的幸福感、満足感10、自信11、達成感9、失望感11、至福感10。合計51。

バウムは、全項目22、3項目が9と評価得点はやや不良でそれほど悪くはないが余り質の高い描画ではない。

バウムの解釈

全体印象は、雑、大きい、落ち着きがないであり、
描画の特徴として、用紙を横にしている、樹冠の中の幹が透けて見える、樹



Hさんのバウムテスト

冠が大きい、全体に斜めの線が描かれている、樹冠の描き方に動きがあるなどである。

空間的側面としては横書きであり、自分のおかれた状況に満足していないか不適応感があるかが予想される。あるいは、自己中心的な面の現われでもある。樹は画面いっぱいに描かれていて、自己拡大欲求の強さを感じられる。

動態的側面では筆圧は普通であり、特に攻撃性や不安感を示すものではないがストロークは雑で滑らかな適応的ストロークとはいえない。

内容から見ると、幹は太めで樹冠も大きいことからエネルギーはあるが、幹に傷もあり傷つきやすさを感じられる。樹冠の大きさは知的な面や理想への希求などのあらわれも考えられるが全体の統合性などが良くないのでそれに見合うような成果が上がっていないことを感じていると思われる。特に幹が樹冠のなかで透けて見えるのは自己がのびのびと表現できていないあるいは自覚はされていない本来の自己の在り方を感じさせるものである。透けた枝の先に葉が描かれていることから社会とかかわりたい希望はあるがうまく発揮できていないのかもしれない。根は雑ではあるがしっかりと描いていて地面もあることから社会との関わりを考えると、現実検討力もあり、ある程度は適切に行動していたかもしれない。

全体的に解釈すると、エネルギーはある程度はあり社会適応も特に問題はないようだが、自己拡大欲求が強く自分を大きく見せたいが思い通りにはいっていき、不満足感を感じていることが推察される。本来の自己は自信がなく適応的に自己を発揮できていないことが推察される。

脚本分析（インタビュー結果）

兄姉が多かったせいか、幼児期から、親から何か言われたことはほとんど記憶にない。むしろ兄や姉から叱られたりしたようで禁止令は特定できるものはない。親は兄弟が多かったのもむしろ放任であったと感じている。

拮抗禁止令も親からではなく兄や姉からいわれた「嘘をつくな」「だますな」であろうか

幼児決断は、親が放任なのでとりあえず自分でやらなくてはと思っていたが、兄や姉がなんでもやってくれたので依頼心が強かった。ただ、4月生まれであり兄や姉たちの中で育っているのも小学校に入ってから周りが馬鹿に見えて、多少リーダーシップじゃないけど人に負けるのが嫌でこいつより上にいるぞっていう雰囲気の中にいた、あの、これ話してないんですけど、兄弟には「絶対にこの人たちより頭良くなりたい、この人たちが行っている高校より一番の高校に行きたい」と思っていた。負けるのが嫌だった。負けず嫌い。

子供の頃心にきめたことは？座右の銘は？「転ばぬ先の杖」とか「事前準備」とか。用心深い。石橋を叩いて渡らない。決めたら必ずやる。信条というか今ですが、当たり前前を当たり前前にやっていけばそれが返ってくると思っているんですよ。

思い通りにならなかった場合は？頼る。私は、どちらかというとポジティブなんですよ。

自分でやらなきゃしょうがない時にはやる。頼れる人がいたら徹底的に頼る。その人を超えたなと思ったら自分でやる。

困難にあった時の対応は？大きなことはなかった。もうだめだとは思わない。何とかかなる、善処するんですね。一晩寝ると忘れてしまっている。

子供の頃好きだった物語などは？間宮林蔵の本。樺太が島だと自分で歩いて証明したことにすごいなと感動した。学校で間宮林蔵のこと誰も知らない。俺はすごい本読んだと鼻高でした。

これまでの人生は？何も困ったことはなかったよって言いたいですね。

死に対しては？若い頃は考えなかったけど、今は近いなと思う。眠るように死ねれば。寝ていたら記憶ないじゃないですか。

脚本のまとめ

特に禁止令は把握できない。拮抗禁止令は「嘘をつくな」「だますな」であろうか。

幼児決断は、「決めたら必ずやる」困ったときは周りに頼る。その人を自分が超えたと思ったら自分でやる。

基本的構えは、I'm not OK, You are OK（自己否定、他者肯定）で、周囲に頼る面

と、I'm OK, You are not OK(自己肯定、他者否定)で周囲を馬鹿にする、自分が上だと思う、自分でやれば何とか善処できる面の両方がみられる。

座右の銘は、「転ばぬ先の杖」

脚本のパターンは、基本的構えから考えても「勝者の脚本」とは言えないが特に「敗者の脚本」とも考えられない。どちらかという意識的には困ったことはない、何とかなってきたとのことだが、「勝てない脚本」である可能性が高い。

好きな物語は、間宮林蔵の伝記で、すごいことをやったからとのことで何かすごいことをやりたいという、憧れがあるようである。自分ではやってきたことなどをいろいろ語るが満足 of いくものではないようで友人の業績などを語ることで代償しているようでもあった。「いまいち感」を持っているのかもしれない。

以上のことから、自覚としては自分の人生に満足しているようだが、「勝てない脚本」が考えられる。

自分の人生は良かったと思う事、またポジティブに捉えようとする面が強い。困難なことはなかったし、つらいことはすぐ忘れてしまうとのことから物事にあまり深くかかわろうとしない事、しばらくすると何とかなるとしていることから物事にしっかり向き合う事をしないのが生き方のスタイルのようである。

成育上の影響としては、兄姉に頼ることで問題に直面せずに過ごすことができたこと、成長してからも周囲に頼ることで何とかしてきた事がサバイバルの方法であったことであろう。幸いなことに大きな困難に出会うこともなかったことで深く考える必要もなかったといえるであろう。

バウムテストから見ると、無意識の自己像では、見えない部分、自覚しない部分の自分を何となく認識していることが予想されるがそれをしっかりと見ようとはしていない。むしろそれがサバイバルの方法なのであろう。

自覚的に良い人生だったと思えることは実際に大きな困難がなかったことも要因であろうが、深く考えない事、ポジティブな捉え方がその要因と考えられた。

事例9 Iさん、76歳 女性 元会社経営

事例の概略

現在は一人暮らし。2度離婚しているが再婚の夫は離婚直後に亡くなった。長男、長女はともに結婚して別居 孫1人

原家族は、7人兄妹の真ん中。家は材木屋。

2年前までシンクタンクの会社を経営、現在は会社も整理して悠々自適。

子供の頃は、兄弟が多く稼業の関係でいろいろな人が住み込みで居て、広い家でワサワサとした暮らしであった。一人になりたいと思っていた。母は稼業もあり忙しくほとんど面倒を見てもらったことはない。一歳下の妹が心臓が悪く病弱であったためそちらに手がかかり特にそうだったのかもしれない。母の部屋に全集が沢山あり、それを一人で部屋の隅で読んでいた。少女小説は嫌いで男の子向けの冒険ものなどが大好きだった。一方、活発な子供で外でもよく遊び、近所の子供たちを引き連れて飛び回っていて始終ケガをして絆創膏を貼っていた。父親は仕事も忙しかったせいもあり、昔ながらの家で、決まり事や礼儀などには厳しかったが、子供の面倒は全く見ず、関わりはほとんどなかった。親の目が届かなかったこともあり、家のルールは厳しかったが、それ以外は自由に過ごしていた。学校時代も気ままに過ごしていたが、必要に迫られると爆発的に頑張り何とか乗り越えてきた。

大学を卒業後出版社に入ったが、自分が予想していたようではなく、大好きな書く仕事はできなかったのですぐにやめた。その後自分で仕事を始めても、やりたいことを楽しいからやるというスタイルで通してきた。思いつきですることが多かったが面白がられて結構うまくいった。

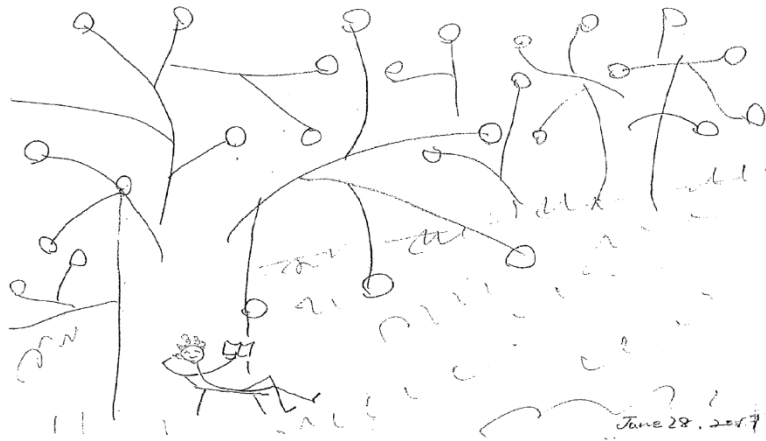
その間に結婚して子供も出産したが、自分の仕事に夢中で夫とはほとんど別の暮らしであったため、自由に仕事をするために話し合っただけで離婚した。50代で再婚したが、相手は助けを必要としている人で何とかしてあげようと結婚した。十数年一緒にいたが、すべきこともしたのでそれ以上頼られるのは嫌だったので離婚した。離婚後比較的すぐに元夫はなくなった。

70歳過ぎて、仕事ももう良いと思って会社を閉めた。

現在は、気功を習ったり、姉妹のところに泊まりに行ったり、ふらりと外国旅行をしたり、友人と会ったりして楽しく過ごしている。

主観的幸福感、満足感 12、自信 12、達成感 10、失望感 11、至福感 8、合計 53 と高い。

バウムは、全項目で 18、3 項目では 8 であり全体にかなり低い。



I さんのバウムテスト

バウムテストの解釈

全体的印象としては、雑、軽い感じ、模様のように描かれていて実感のある樹として捉えられない。明るい、楽しい感じではある。

描画の特徴は、手前の木の向こうにもう 1 本あり 2 本の木が描かれていて並木のように見える。幹も実もリアルに描かれていないので判断がしにくい、幹は解放されていて枝は一線で描かれている。椅子に寝そべって本を読んでいる人物が描かれている。根は描かれていないが、地面は画面全体に右上がりに描かれている。地面の傾斜は不安定感があり、適応しようとしないうちに描かれるといわれているが右上がりの場合は現実を肯定的に眺めているともいわれている。空間的側面としては用紙を横向きに使っていて、おかれた環境に不満足感があるのかと推察されるが絵の雰囲気からはそれは感じられないが外界に自分を合わせようとはしない自己中心的な性格の指標とも言われている。

全体的に雑で漫画のような樹であることは「実際にイメージする樹を少し丁寧に描いてください」とのインストラクションを行っているのに、無意識に自己を表現するのを避けているのかもしれない。

動態的側面では、筆圧は普通でストロークも特に問題はないが、雑に気軽に描いた印象が強く物事にキチンと向き合おうとしていない面が強く感じられる。そのため、全体的印象や統合性はかなり良くない。また、安定性も軽い印象のせいか良くない。評価の重要なポイントなる 3 項目の評価が低い要因となっている。内容的には、解放の幹から、感情統制の悪さ、自他の境界の曖昧さなどが考えら

れるが、反面、自由な感情の流れ、外界との関わりの指標とも考えられるので解放的なパーソナリティの表れであるとも考えられる。枝が一本の線で表されていて、未熟さが感じられるがこれも雑な描き方によるものかもしれない。枝は広がりを見せ四方に向かって伸びているが一貫性がなく興味の対象がバラバラに沢山あることが推察される。実は、四方に伸びた枝の先に沢山描かれており、目標とするものや成果を求めるものが多いことあるいは得た成果が多いことが伺われるがやや自己顕示的な面もうかがえる。人が描かれていることから自己愛的である可能性もある。

2 本の木が描かれていることから自己の中で現在の自分と分離した自己像があるのかもしれない。

全体として、軽く、雑に描いているため子供が描いたような印象が強く、I さんのこれまでの仕事内容や現在の応答から知的レベルの高さが考えられることとのギャップが強い。

未熟な面が感じられるが、前述のように自己を表現したくないかじつくり何かと向き合おうとしないかの面が推察される。

特記すべきは、自己分離を示す 2 本の木と描かれた人物であろう。自己顕示欲や自己愛的要素が示されていると思われる。

脚本分析（インタビューから）

交流分析的に見ると、禁止令は、それほどネガティブではないものの「近づくな」があると考えられる。父親は昔風の家長で直接かかわることはなく、母親は雇人も多く多忙であり、子供も多く、その上、一歳下の妹が病弱であったため I さんにはほとんど手をかけていず、忙しそうに近くにも行けない感じだったようである。そのため、元気に外で遊んでいるか、一人で本を読んでいることで良しとされていたのではないだろうか。そうすることが親に承認される方法だったのだと思われる。ただし、「母は子供の扱いが上手だった」ということで、兄弟姉妹はみんな自分が一番可愛がられていたという思いを持っていたとのことであった。「あなたが一番よ、あなたにいつも目をかけているわ」という感じのことをね、母はやっていたのよ、何だかわからないけど」

このことから意識的には愛情飢餓はなかったようである。

許可は「自由にして良い」「好きなことをして良い」であろう。

拮抗禁止令は、学校のことは、「勉強をなさい、それが正しいことです」であり、昔風の家風で伝統行事や日頃の生活の仕方などきちんと決まっており、家のことでは、「こういうことで学びなさい」という育て方でしたね。食事の時の座る位置も配膳の順番も決まっていたり、お風呂の順番も決まっているなどから「しきたりやルールに従いなさい」、自由にして良いが「勝手をしてはいけない」

だったのではないかと推察される。

にもかかわらず、脚本信条は「周囲に合わせなければならない」であり幼児決断は、「周りの様子をみて合わせよう」であると考えられる。「7人兄弟の真ん中なのでいつも自分の立ち位置を考えていて、みんながどういう風にされているかをみて、キョロキョロして、だから八方美人になりましたね。」

しかし、実際はそれが嫌だったのか、私はどうしても一人になりたかったわね。いつか一人で生きてみたいと思っていました。もう一つの幼児決断は「早くひとりになろう」「飛び出そう」であった。また、その後の学校生活では、学校に合わせる事はなく非常に自由な生活であった。学校でもずっと図書館にいたり、授業中に勝手に本を読んでいたりして呆れられ、そういう人だからと思われていた。

ということで実際に周囲をキョロキョロみまわしていたことと矛盾する様子であった。おそらく、そうした幼児期からの反発が大きかったのかもしれない。生き方や性格については「惚れっぽく生きていこうと思っていますからね。色んなものについて。性格はそそっかしいですね。脳を通して考えないで、手で感じたものをそのまま出す。あっ、と思ったらすっ飛んじゃってる。

あんまり現実を見ていないかかもしれないと思うのね。現実見ると厳しくて、きっと私が変わらなきゃと思うかもしれないけど、中略 本当に脳が腐っているのかもしれないな。」

困難なことへの乗り越え方は、結局解決しないから手放すこと。自分が一番大事なのね。自分を信じるっていうか、私の人生です、みたいかな。わがままだよな。

2度の離婚についてもそう考えている。

ストレス状況になった時は、体を動かす。とにかく籠らない。家の中じゃなくて自分にこもらないようにしようと思えばできる。

印象に残っていたり好きな物語は、「トムソーヤの冒険とか。冒険もの。そういうなりたい自分がそっちの方にいたような気がする。そういう風にもう一人の自分を探して本を読んでいた気がするのよね。

今好きなのは自分が目指す人の写真集とかそういうもの（例えば、キャサリン・ヘプバーンの写真集）。

タイムマシーンに乗って遡ってたどりのつくのは？

一緒にいて、可愛がってくれたおばあちゃんが死んだとき。おばあちゃんの隠居部屋が好きだった。そこでひたすら泣いた。人の涙って熱いんだなと思った。現在でイライラすることは？

なんでもぶつけてしまうからイライラしたり不愉快になったりすることはない。これまでの人生は自分にとってどのようなものでした？

丈夫なおかげで脳が活性化しないでも生きてこられました。

死については、70 くらいまでほとんど考えたことなくてきました。今はそのおばあさんのこともあって、自然に自然に死んだ姿をみているのでそれをやりたいたいと思っています。

インタビューのまとめ

禁止令は「近づくな」であり、それほどネガティブに影響はしていないようだが、人とかかわりながらも一人でいる事や自己中心的で自分のことが一番と言っているように人と親密に近づくことが実は苦手なのかもしれない。

拮抗禁止令は、「勉強しなさい、それが正しいこと」と「ルールには従いなさい」であろう。環境的なこともあり周囲に合わせようと八方美人でいたが、反面それに抵抗する気持ちが強くなり、反動からか中学生くらいからルールから外れた生活に変わっていたようである。しかし、それが本来の自分であったと認識しており「人は変わらないですよ」と断言してもいる。

幼児決断は「一人になろう」「飛び出そう」であるり、それが現在まで続いている。

脚本のパターンは、自分が好きなように生きてこられたということから「勝者の脚本」と考えられるが、無意識のところで別の自分を感じていることもありそうである。本当の意味で自己実現であったのかは疑問である。

好きな物語は、冒険もので、その主人公が別の自分のようで、そういう生き方をしたい、と述べており、生き方はそれを実現しているように見えるが、実はもっと別の自分だったのかもしれない満足感はないのかもしれない。

バウムに描かれた 2 本の木は、自分が感じている自分とは別の自分の存在を感じているのかあるいは八方美人の自分とそれに対抗する自由な自分の 2 面性の表れなのだろうか。いずれにしても安定した自己感を感じていないのかもしれない。

これまでも、現在も元気で生き生きとした生活をしている要因は、自分でも何回も述べているように、「深く考えないこと、脳を活性化させないで、パッと行動すること、問題にじっくり向き合わないこと」なのであろう。

兄弟も多く、他と比較したりするのは辛くなるし、解決できないので、体を動かして考えないようにしてきたことなどが語られているので、ある種の諦観なのかもしれない。

深く考えない、問題にじっくり向き合わないというのは、無意識の自己像として描かれたバウムテストにも明確に示されている。

この事例でも、諦観と深く考えないことというのが元気で生活している要因と考えられた。

以上、9 事例についてインタビュー結果から脚本分析を行い、バウムテストに示された無意識の自己像との関連を事例ごとに検討した。

7) 結果

9 事例について概観すると

事例 1 (A) は、意識的自己像も無意識的自己像も共にかなり得点が高く、実生活でも元気で社会活動を行っている。脚本分析によって成育歴を検討したところ、マイナスの脚本（敗者の脚本）を形成させるような問題はみられなかった。

元気な要因としては、物事に対するポジティブな認知スタイルにあると考えられることと、意識して「上手くやれる」という自信を確認することと思われた。

事例 2 (B) は、意識的には頑張って自己実現している自己像を持っているが、バウムテストに示された無意識の自己像はかなり未成熟で緊張感があり、ゆったりした安定感のあるものではなかった。インタビューによる脚本分析でも親子関係など成育歴上での問題がかなりはつきりと示されていた。しかし、現在元気に社会参加していて自分でも満足している要因は何であろうか。無意識として感じ取っている自己像は恐らく虚勢をはっている緊張感の高い、伸び伸びしたものではないと推察されるが、それを認めず、状況をはねのけようとする頑張りであろうと考えられる。

事例 3 (C) は、意識的には問題なく自己実現していて社会的に勝者の脚本を形成しているようだが、バウムテストに示された無意識の自己像は自信を持って自己実現したものではなく、常に何かから抑圧され、遠慮して、自分を抑えていることが推察された。脚本分析からも成育歴上の問題が示されていた。そのため感情の鬱積が考えられるものであり、高齢期になっても自分らしくは過ごせていないことが考えられた。積極的に社会活動に従事している要因を考えると、現状の受容であろうか。高齢者の自分の人生をこれで良かったと思う合理化もあり、思い込みもあるのかのかも知れないが、「結構良かった、大変なことも恵まれていたことの中のことで、仕方のないこと」と自分で思っているようだ。インタビューの中でもしばしば語られたが、幼児期に裏切られた思いが尾を引いているようであったが「一人で乗り切る」という幼児決断が、頑張って今を保っていると思われた。

事例 4 (D) は、バウムテストに示された無意識の自己像にかなり問題があるようであった。自覚的には、問題なく日常生活を元気に過ごしていると思っているようだが、脚本分析によれば、成育歴上の母親からのメッセージにより自尊感情が低く、実生活でいろいろな問題を抱え、我慢している様子がインタビューからも伺えた。友人との付き合いなどは相手に合わせていることもあって表面は問題なく過ごしていると思われる。

事例 5 (E) は、インタビューから推察すると、禁止令が与えられてはいたようだが、それを受け取っていない。多少、自信のなさや不安感の中に持っていて、意識的自己像や日常の行動から（インタビューの中での生活の仕方についての語りからは積極的でどちらかというとガンガン行動する）は少し隔たりがあるが、内心は傷つき易くナイーブさを持った自己像であることがバウムテストや成育歴から想像される。しかし、生来がのん気で雑とのことで余り真剣に深く考え込まないことと自分の状態を受容していることが元気でいる要因と考えられる。

症例 6 (F) は、特に成育上の刺激は良くも悪くもなかったと考えられる。しかし、脚本分析から、愛情欲求が満たされなかったことが示され、確固とした自信のある自己像が描けていないことが推察された。大きな困難に出会うこともなかったのも、深くものごとにかかわることもなく平凡にそこそこに過ごしてきている。何とか元気でいることの要因は「こんなもんだ」という自己受容、状況の受容あるいは諦観であろうか。また、深くものごとに関わらない態度、また、これで良いという捉え方にあるように思われる。

例 7 (G) は、脚本分析から禁止令らしきものは認められず、厳しい両親であったようだが、心の底で愛されているという自信があり、問題にはなっていない。やはり余り深く考え込まないとのこと。しかし、自己拡大欲求や自己顕示欲がややあり自分でもっとこうすればよかったとか、状況が許せばもっと～とかの思い強く、少し前までは置かれた環境に不満足感も持っていた。高齢になってそれを受け入れるようになっている。全体としては問題の無い脚本であるが「平凡な脚本（勝てない脚本）」の持ち主と言えよう。元気な要因は「こんなものだろう」という自己受容、状況の受容、諦観であると考えられる。

事例 8 (H) は、インタビューによる脚本分析からは、特に目立った禁止令のようなものではなく、拮抗禁止令に従って真面目に着実に成育してきた事が話された。自覚としては自信を持っていた面と周囲に依存する面をもっていた。周囲に頼りながらうまくやってこられたとのことだが、しっかり向き合えなかったためか表面に出ていない自己像を感じているようでもあり、少し自己確実感に欠けるのかもしれない。しかし、自分で満足して元気に過ごしていられるのは、物事に直面しないで、困ったら避けるという生き方のスタイルによるものではない

いかと思われる。

事例 9 (I) は、脚本分析から見ると、禁止令はごく弱いものだが、「近づくな」が考えられる。しかしそれをはねのけるエネルギーと力があつたようで、拮抗禁止令も幼児期は受け入れながら、そこから脱出して活動している。かなり人生の生き方としては成功しているが、深く考えない、「脳を働かせる前に行動している」との事が自分でも元気な要因と述べているように物事をじっくり考えて行動はしていなかったようであり、むしろそれが サバイバルの要因であつたようである。現在も元気な要因は深く考えない事のようなのである。

8) まとめ

主観的幸福感尺度に見られた意識的自己像及びバウムテストに示された無意識の自己像と脚本分析による成育歴の三者の関連、および高齢期の現在、元気で活躍しているあるいは元気にふるまっている要因として考えられることについてまとめると以下の表のようになる。

事例	意識的自己像	無意識の自己像	成育歴との関連	要因
1	高い	良好	◎	認知スタイル
2	高い	やや不良	◎	思い込み
3	普通	やや不良	◎	諦観・受容
4	普通	不良	◎	忍耐
5	普通	普通	△	自己受容
6	普通	不良	○	状況受容
7	普通	普通	△	考えない・受容
8	高い	やや不良	○	困難回避
9	高い	不良	○	考えない

主観的幸福感尺度は、平均点を基準に、50 点以上を高い、42 点～49 点を普通、41 点以下を低いとした。

バウムテストは評価得点で 4 段階に分け、良好：28 点以上 普通：23～27 点、やや不良：19～22 点 不良：18 点以下とした。

9) 考察

今回、脚本分析を行った9症例をまとめると4つのパターンが挙げられる。

1つ目：意識的自己像が高く、無意識の自己像も良好なパターン

2つ目：意識的自己像は普通、無意識の自己像も普通なパターン

3つ目：意識的自己像は高いか普通だが、無意識の自己像がやや不良で何らかの問題が示されている

4つ目：意識的自己像は普通か高いが、無意識の自己像はかなり問題が示されているパターン

1つ目のパターンは、事例1のように、意識的自己像と無意識的自己像がほぼ一致していて、高齢期になっても無理なく元気に活躍できているパターンである。また思考がポジティブであり前向きであることがさらに元気をもたらししていると考えられる「勝者の脚本」と言える。

2つ目のパターンは事例5と7に見られるもので、意識的自己像は普通で、無意識の自己像も普通。成育歴上は問題ないが本質的な自己に対する自信が無かったり、傷つき易かったり、自己顕示欲が強かったりと無意識の自己像形成に多少の問題があり、自己実現しにくく、「勝てない（平凡な）脚本」になっている場合である。しかし、状況の受容や、諦観でこんなものだろうという自己受容も可能になり、多少は「いまいち」感をもちながらも一応現状に満足し、元気で活躍できているケースと思われる。

3つ目のパターンは、事例2と3と8で、2つ目のパターンと同じように意識的自己像は普通か高いが無意識の自己像があまり良くないと思われるケースである。事例2は、成育歴上に問題があり、禁止令、拮抗禁止令の影響を強く受けている。事例2は、自分の問題に気づくことが無く、頑張っていて、意識的な「自分はできる」「自分が一番、他はビリ」という自信で保っている。一見上手くやっているようだが日常生活では対人関係などに多少問題もあり、無理をしているようである。自分は正しいという思い込みがある。事例3は、かなり抑圧されているので本人は多少辛いのではないと思われるが、「仕方のないこと」という捉え方と意識的に頑張らねばという思考が強く、それが支えになり日常生活で元気に社会的に適応して活動していると考えられるものである。事例8は、問題を回避して物事に向き合うことを避けて実生活では問題なく過ごしているが無意識的には確実感のある自己像を持っていない事が考えられる。

4 つ目のパターンは、事例 4 と 6 と 9 のように意識的自己像は高いが無意識的自己像はかなり悪いというものである。

事例 4 は無意識的自己像はかなり悪く意識的自己像は良いと認識しているが、実際は日常生活でもかなりつらい状況があり、無理をしているようで、バウムテストに示されているような無意識的自己像を何となく感じ取っているものと思われる。元気は根拠のない空元気で、周囲に合わせている状態が推察される。事例 6 と 9 は、物事に直面しない、困難に向き合わずに過ごしてきているが無意識のところでは不全感を持っているのではないかと思われるものである。しかし、事例 6 と 9 はインタビューから把握できる範囲では問題がなく、脚本の書き換えが望ましいと考えられたのは事例 4 のみであった。

まとめると以上のようになるが、個々の事例についてはそれぞれに問題の深さが異なり問題そのものも違っている。

今回は、9 事例共、何らかの形で社会参加している元気な高齢者であり、社会参加のレベルはかなり高い対象であった。主観的幸福感はある以上であり、意識的自己像は良好なケースである。しかし、無意識的自己像をバウムテストによって把握したところ、やや問題のあるケース 5 例とかなり問題が示されていたケース 1 例と計 6 例見い出された。

すなわち、無意識的自己像によって日常生活の適応度がそのまま決まるのではないようである。

各事例を検討することで、意識的自己像と無意識的自己像の関係はどのようなになっているのか、改めて考察してみた。

その結果、無意識的自己像に大きな問題がある事例は別にして、高齢者は自分の生き方を肯定する傾向にある。生き方を合理化することで安定感を保っていることも考えられる。また、置かれた環境も含めて自分の位置や状況を受容する傾向もある。ほとんどの事例で「仕方のないこと」「こんなものだろう」との発言が随所にみられる。

諦観、思い込みとも取れるが、もう少し前向きの傾向があり、自己受容に至っている場合が多い。いくつかの事例で良く見られたのは「深く考えない」「ボーっとしているところがある」「そうかなあと思っていた」「のん気」「雑なところがある」という発言であった。

また、いくつかの事例で物事の捉え方がポジティブであることもうかがわれた。高齢者に限らないが、特に高齢者では、主観的幸福感健康度の影響が大きく、また、意識的自己像が影響しているようだ。無意識的自己像がやや問題をもっているとしても、意識的に自分にいいきかせることで安定を保ち健康度をも保つ

ているようである。

無論、成育歴から成立が予想される無意識の自己像に問題が大きい場合は元気にみえても無理をしていたり、我慢をしていたりということが考えられる。そうした場合には高齢者であっても脚本の書き換えをすることが必要であろう。

今回のインタビューを通しての脚本分析の結果、やはり無意識の自己像は成育歴との関連が大きいということであった。

意識している自己像と無意識の自己像は必ずしも一致しない。無意識の自己像は成育歴と非常に関連が強い。無意識の自己像があまりよくない場合でも本人の性格や思考の仕方、認知の在り方によって意識的自己像は良く保つことが可能であることが分かった。しかし、成育歴上の問題が大きく、無意識の自己像が不良な場合は、外から見て元気そうにふるまっていたとしても実際はかなり辛かったり、不安定であったり、自分で上手くできていると思い込んで問題に気づこうとしていないなどが考えられた。

第4章 総合考察

現在は、高齢社会であり全人口に対する高齢者の割合が高くなっているが、いわゆる元気な自立高齢者も多いことから、本研究の対象は適応的生活を送っていると考えられる在宅自立高齢者とし、今回の対象者の考え方や対処の仕方など元気な要因を探り、不適応状態が考えられる高齢者への支援の方法の参考にすることを目的に研究を行った。

自覚的自己像としての主観的幸福感について

はじめに、健康に影響すると考えられている自己像（戸ヶ崎ら 1993）を把握できる主観的幸福感はどうであるかということと、感情の状態はどの程度であるかということ調査した。その結果、15項目の主観的幸福感得点は、大学生の平均より高いことが示されていた。今回の調査では何らかの形で社会参加している元気な高齢者を対象としたため、先行研究の結果（山下ら 2012）にもあるように一般高齢者を対象とした場合より充実感や満足感がやや高めであったことが幸福感を高めた要因と考えられた。これは特に大きな問題を抱えていない場合は、高齢者になると自分の人生を受容する傾向があると思われ、それが主観的幸福感高得点の要因であるとも考えられた。

社会階級による高齢者の主観的幸福感についての研究（山本ら 2011）でも、社会階級に関係なく、自主的な活動などの何らかの生きがいがある活動を通じて人との相互関係を維持することで得られる達成感や充実感による高齢者の主観的幸福感の高さが指摘されている。ちなみに、前期高齢者 65 歳～74 歳と後期高齢者 75 歳以上を比較したが、差はなかった（中村 2018）。

さらに、高齢期における主観的幸福感の研究（中川 2018）では高齢になるほど、人生に限りがあることを認識し、短期的に肯定的感情を得ようとする動機づけが高まるとする結果を述べており、今回の調査の高齢者の主観的幸福感の高さと整合する。

また、最近では、エイジングパラドックスという「加齢に伴ってネガティブな状況が増えるにもかかわらず、高齢者の幸福感は低くない」という現象も注目されている。エイジングパラドックスは、加齢に伴った資源の喪失や衰退に対して適応していくモデルとして「補償を伴う選択的最適化」が提唱されている。これはこれまでできたことがうまくできなくなった時に前よりも少し目標を下げる（喪失に基づく目標の選択）、選択した目標に対して、自分の使える時間や体力を効率的に振り向ける（資源の最適化）、他者の助けやこれまで使っていなかった補助を使う（補償）の事である（権藤 2015）。そのことから高齢者の高い幸福感も考えられるが今回の対象者にはあまり当てはまらないかもしれない。も

う一つのモデルとして考えられているのは、現状を良いことだと捉えなおしたり、他人よりも良いと考えたり、無理やり納得させたり、目標をあきらめたりするという方略についてである。このモデルでは目標達成が難しい状況に至った場合に、その状況を認知的に対処することで幸福感が維持できると考えるものである。このモデルは今回の対象でもいくつかの事例で当てはまると思われる。また、3つ目のモデルとして、幸福感を維持する事自体が高齢者の目標になるという考えがある。このモデルでは高齢者は残りの人生が短くなるにつれて死を意識するようになると、心理的な安寧を求めようとする気持ちが強くなり、ポジティブな気持ちが高まる情報を好むようになるとの考えである。このモデルでは、加齢に伴って幸福感を高める動機づけが強くなり、それに基づく行動が増えるため幸福感が強くなると考えるものでこれもいくつかの事例で当てはまると思われた。

また、サクセスフルエイジングの考え方（杉澤 2015）であるが、今回の対象でいわゆるサクセスフルエイジングに相当すると思われる事例がほとんどであったことも幸福感の高得点の要因ではないかと考えられた。サクセスフルエイジングの定義はまだ不定であるが、おおよその考え方としてその構成要素は長寿、生活の質、社会貢献、と言われ、その中の生活の質については身体的健康、機能的健康、認知能力、時間の有効な使い方、社会活動が挙げられており（柴田 2002）、今回の対象はそれらが保たれているといえる。また、社会貢献についても有償・無償の労働、相互扶助、ボランティア活動、保健行動などが該当すると考えられており、この点でも今回の対象者の多くはサクセスフルエイジングを体現できていると言えよう。サクセスフルエイジングの様々なモデルとしての見方でも社会学的モデルとして活動理論から見て社会活動を継続している事、医学モデルとしては、疾患に罹患していない、疾患のリスク要因を有していない、機能に障害がない、社会参加をしているに当てはまり、心理学モデルとして良好な心理状態としてあげられる自己受容、人生の意味、環境制御、人間的成長、自律性、肯定的人間関係についても多くの事例でほとんど獲得されていると考えられる事から、主観的幸福感の高さが肯けるものと言えるのではないだろうか。すなわち、主観的幸福感、満足感、はサクセスフルエイジングに代表されるような良好な心理的状态から自覚的自己像・意識的自己像が形成されていることが分かった。

別の観点から、在宅高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼす研究では、いくつかの要因の中で「笑いの頻度」に有意の差がみられた（山下ら 2012）としているが、今後はそうした要因についての検証も必要であると考えられる。

感情尺度について

感情状態を把握するために SDS（自己評価式うつ尺度）と STAI（特性-状態不安尺度）を実施した。その結果、平均しても抑うつの傾向はみられず、個別にみてもうつ状態を示した人はいなかった STAI（特性-状態不安尺度）の結果でも不安の程度は低く、今回の対象では感情の状態も良好であると言えた。しかし、SDS も STAI も質問紙法であるため、意図してはいなくでも問題の無い方へチェックをしてしまうソーシャルデザイアビリティの傾向もあると考えられ、無意識の自己像や感情状態を把握するバウムテストとの相関がないケースも多く、この結果はあくまで自覚的な結果と考えて良いのではないかといえるであろう。

在宅高齢者の心理・精神的特性と社会的行動特性の研究では、臨床的知見や疫学調査から高齢者特有の主要な心理特性や精神障害の特徴として、抑うつと不安があげられているが、生きがい感、自己効力感及び自尊感情が安定積極心性を構成し、社会的行動特性を高めるとしている（青木ら 2012）と報告しているように、今回の対象者は全員が社会参加していることから、抑うつや不安が低い事が肯ける。

無意識の自己像としてのバウムテストについて

同時に実施したバウムテストでは、無意識の自己像や感情状態、葛藤などが示されるとされるが、全体に評価得点は良くなかった。3点を普通とした評価得点でも平均は3点以下であった。しかし、バウムは得点の良いものも含まれていて、個人によって評価はかなり違っていた。つまり、意識している自己像と無意識の自己像がほぼ一致しているケースも乖離しているケースもかなり存在することが推察された。

そこで、今回の高齢者を対象にバウムテストの描画を検討してみた。

大学生の描画との比較（中村 2018）では、エネルギー量の目安ともなる幹の太さに有意な差があり、高齢者は元気に見えても心的エネルギーが全体として低くなっていることが分かった。

自己拡大欲求の指標でもある「はみだし」に関しては大学生が有意に多く、おかれた環境（実際・心理的）への不満足感、不適応感を示す画面の使い方である「横書き」は大学生の方が多かった。また、「樹冠」については大学生の方が多く、高齢者は枝や葉をまとまった樹冠として表現している人は少なかった。これは、大学生（若者）は実際の木をリアルにイメージする環境に無くイラスト的な描き方の樹をイメージすることが多いことなど文化的な違いであるとも考えられた。若者とのバウムテストの比較から、高齢者は自覚的には元気だが、やはりエネルギー量は減少傾向にあることが分かった。また自己の置かれた環境については

受容的であることも示唆された。

ちなみに、前期高齢者 65 歳～74 歳と後期高齢者 75 歳以上を比較したが、差はなかった。

高齢者に対するバウムテストは、言語に頼らずに実施できることから、認知障害などを把握するために用いられることも多く、アルツハイマー病や脳血管性痴呆などの診断に有用なツールとされている (M. S. Maserati 2015)、また HDS-R (改定長谷川式簡易知能評価スケール) との比較などの研究がなされている (坂口ら 2005)、非認知症群の年齢比較も行われているが特に社会参加については触れていない (坂口ら 2006)。ここでは社会参加している認知症でない高齢者を対象としたこともあり、バウムテストを無意識のパーソナリティを把握するものとして用いた。

その結果、自覚的自己像は良好でも無意識の自己像がやや不良あるいは不良である事例も散見され、二つの自己像が必ずしも一致しないことが分かった。

これは、高齢者は意識的に自己を正当化する、あるいはポジティブに捉えようとする傾向が前述の研究からも推察されることから、意識的あるいは自覚的な自己像は概して良好だが、自分では操作できない無意識に形成された自己像が不良である場合があるといえる。

成育歴との関連について

次に、意識的自己像と考えられる主観的幸福感と無意識の自己像とされるバウムテストに個人差が大きかったことからその両者の相違の要因を検討することと、自己像の形成に影響があるといわれる成育歴との関連を検討することを目的に質的研究を行った。

主観的幸福感尺度の得点を自覚的自己像と考えバウムテストを無意識の自己像と考えた場合、それぞれの得点の高低で事例を選択したいと考えたが、前述のようにほとんどの事例で主観的幸福感が高く、高くない場合でも平均的であったため、バウムテストの評価点での違いで 9 事例を選定した。

選定した 9 事例を特徴別に分けると 4 グループに分けられたが、大きく考えると自覚的自己像に問題がなく無意識の自己像も良好か特に問題が見られない事例と自覚的自己像については問題ないように見えるが無意識の自己像は問題が見られる事例に分けられる。しかし、脚本分析の考えに当てはめて個別に詳しく検討すると成育歴が明らかに無意識の自己像の形成に影響していると考えられるものと大きく影響したエピソードが示されていない事例もあった。

無意識の自己像と成育歴上のエピソードとの関連が明らかな事例が 9 事例中 4 例、影響がありそうな事例が 4 事例であった。1 事例はあまり明確ではなかったが成育歴と無意識の自己像が全く関連なかったと思われる事例はなかった。

無意識の自己像が良好でない場合でも、日常生活は適応的で元気に社会活動をしている事例がほとんどであることから無意識の自己像が日常生活に与える影響は当初予想したよりは少ないのかもしれない。しかし、インタビューでは、やはり語られない部分もあり、実際に「まだまだお話しできないこともあるんですよ」（事例 3）との発言もあることから断定することは難しい。無意識の自己像の形成に問題が見られる事例でインタビューからも問題が推察され、日常生活に影響していると思われる事例もあった。

しかし、この事例でも自覚としては問題はないというものが多く、その要因はやはり自身の捉え方の問題であると予想された。

高齢者になると自分の生き方を振り返って、「それほど悪いものではなかった」「こんなものだと思う」「それなりに過ごせた」「深くは考えない」など、受容や諦め、合理化、回避、思い込みなどの機制が働くものと考えられる。

以上のことは、高齢者は、自己の情緒的安寧を図るため自己をより良くとらえようとするという精神発達の観点からも言われている高齢者独特の特徴とも考えられるものである。

そのように考えると、無意識の自己像の在り方は日常生活に関係ないのであろうか。むしろ自覚的自己像の方が日常生活の適応度に影響を与えているようにも考えられる。確かに、3 事例に関しては無意識の自己像がそれほど良くないと思われる場合でも日常生活は適応的に過ごしていると思われた。しかし、インタビュー結果を検討すると一見問題がなさそうだが、実際には自己に対する確実感が無いようであった。

ここで、高齢期になって、外部から見ても問題が特に感じられず、本人も大きな問題を持っていない場合、無意識の自己像を変更する必要があるのだろうか。むしろ、これらの事例に示されたように、現状受容、諦観、合理化などを含めた認知の仕方が適応感に必要なのかもしれない。

研究の当初は、無意識の自己像が不良である場合は実際に不適応感があったり、無理をしているのであろうと考えていたが、それほどでもないという結果でもあった。

しかし、反面、自覚的には適応的生活であっても実際はかなり問題があることが伺える事例もあったことも否めない。要するに、成育歴上で否定的な大きな感情体験が無ければ何とか高齢期には適応的に過ごせると言えよう。

9 事例にみられた元気な要因について

社会階級別に高齢者を対象に行った先行研究（山本ら 2011）でも、半構造化面接によるインタビューで、「自分の人生なんて振り返ったことない」「苦労を苦労

と思わないから幸せな人生だったとしか言いようがない」「何とかやってこられました」「良かったなあということが私のまゝ、人生観です」「今の到達点を見る限りは幸せな形の中で今の生活させていただいている～」「気楽にいます」という発言が社会階級に関係なく多くなされている。また、この研究では高齢者自身が自分の人生歴を振り返ることにより人生を肯定的に捉え主観的幸福感を増大させる可能性が示唆されたと結論づけてもいるように、今回の調査研究でも人生の振り返りの語りが無意識の自己像の存在にかかわらず自覚的に人生を良いものとして結論づけた事例が多かったこととも関係すると考えられた。実際に、インタビュー終了後に自分を振り返る機会を得て良かったとのコメントがいくつかの事例で示されてもいた。

高齢者の健康関連のレジリエンスについての研究（小林ら 2018）では、認知的エネルギー、楽観性、行動力、自己と人生の受容などがあげられ、特に高齢期には受容、忍耐という心理的な対応、価値の転換、現実的な人生の目的の再構築などが挙げられており、今回の事例のインタビューの内容にもかなり合致する事柄があった。今回は脚本分析を基に成育歴による自己像を把握することを目的としたが、それとは別に元気に社会活動する高齢者の自己像の在り方がレジリエンスの構成要素にもあることが示唆された。

老年期における心理社会的課題はエリクソンによれば第Ⅷ段階の統合対絶望だが、第Ⅷ段階の再検討の研究では、老年期においても第Ⅰ段階の基本的信頼感対基本的不信感から統合対絶望までの8つの心理社会的課題があり、それぞれの課題における肯定的要素と否定的要素のバランスによって発達の説明される（深瀬ら 2010）とされているが、老年期にも第Ⅰ段階からの課題への取り組み方が社会参加に積極的なことと関係するようである。したがって、本研究の脚本分析からも見られたようにこれまでの心理社会的発達課題に高齢期になってからもどう向き合っているかが統合された心理的状态とかかわるのかもしれない。

質的研究法としての脚本分析について

ライフレビューは高齢者を対象とした質的研究に用いられる事が多いが、自己対面法を用いた研究（森 2008）では、主観的幸福感が上昇した事例を挙げているなど、インタビューの結果として主観的幸福感や自己効力感が上がる事も報告され自分の人生を語る事の意味が示されている。

以上のように、高齢者に対しては、ライフレビューやライフヒストリー研究などが質的研究として有用であることが考えられるが、今回の研究ではすでに主観的幸福感や自己効力感などが高い高齢者を対象にした。様々な質的研究として、ナラティブなアプローチがあるが、脚本分析では、成育歴上の感情的出来事に焦

点を当てて自己像が形成される要因を探索していく。語りの中での成育歴上の感情体験が自己像に影響するなど、比較的効率的に成育歴との関連を把握することができるのではないかと考えている。

脚本分析は、無意識の自己像が不良であってそのことが要因となって、生きづらさを感じたり、生き生きと生活できず不適応感を抱えている高齢者へのサポートにその不適応感の要因を把握して元気に過ごせるように生き方を適応的に変え、認知の修正を進める方法として効果が得られるのではないかと考えられるのである。

したがって、長年脚本に振り回されてきた高齢者であっても、脚本分析によって自分の問題に気付くことで不適応感や生きづらさから抜け出すことが可能となる。

その取りかかりとして、幼児期の感情体験から形成された無意識の自己像を把握することができるバウムテストの実施が役立つものと考えられる。

研究結果の利用と今後の課題

考察の結果、元気で社会参加している今回の対象者は、主観的幸福感尺度からもインタビュー結果からも自覚しているあるいは意識的な自己像はかなり良好であることが分かった。その要因としては、無意識の自己像や成育歴上のエピソードの影響はあるものの、物事のとらえ方が関わっていることが大きいと考えられた。しかし、無意識の自己像は成育歴上のエピソードとの影響が意識的自己像の形成よりさらに大きく、自覚的自己像との間に大きな差がある場合には不適応状態も引き起こすことが予想された。

今回の研究目的である、社会と適応的に関われない高齢者への支援の方法を検討する場合には、バウムテストを実施し、対象者の無意識の自己像を把握し、心理的問題を把握することができれば有効なアプローチの方法を見つける補助となると考えられる。

バウムテストに示された無意識の自己像に大きな問題が見いだされない場合は、物事のとらえ方や考え方などについての介入も効果があると考えられる。

無意識の自己像に問題が見られる場合は、脚本分析を行い、対象者が希望すれば「脚本の書き換え」を含めた交流分析的アプローチが有効であると考えられる。今回の研究では、対象者が自立高齢者であり、対象者自身が問題意識を示していなかったこともあり「脚本の書き換え」については触れていない。

今後の課題としては、問題を持つ高齢者の脚本分析と脚本の書き換えを検討し、その効果を検討することも重要であると考えられる。

今回の研究では、バウムテストの検証を行うものではなかったが、結果としてインタビューの中でも成育歴のエピソードとバウムテストに示されたパーソナリティの問題がかなりリンクしていた事がわかった。このことから意識的な自己像の把握だけではなく、高齢者理解にもバウムテストの結果が活かされるのではないかと考えられた。

インタビューガイド

- ・あなたが子どもの頃両親によく言われていたことはどんなことでしたか。
- ・両親はあなたに対してどんな養育態度だったと思いますか。
- ・両親からのメッセージ（有言・無言）をどのように受けとめていましたか。
（親のメッセージに対して心の中で思っていたことはどんなことでしたか。）
- ・両親から影響を受けたと思うことがありますか。
- ・子どもの頃、心に決めていたことはありますか。
- ・自分の性格はどのような特徴がありそれを自分自身でどう思っていますか。
その性格が形成された主な要因は何だと思っていますか。
- ・あなたの信条・信念あるいは座右の銘はどのようなことですか。
- ・子どもの頃、困った時や行き詰った時どのようにしていましたか。（よくとっていた行動）
その方法はいまも同じですか。
変わったとすると、変わったのはいつ頃ですか。
変わったきっかけがありますか。
- ・今、ストレス状況になった時の対処法がありますか。（困った状況・嫌な事柄をどのように受け止め、どのように考え、どのように対応しがちですか）
- ・あなたが生きている上で最も大事だと思うものは何ですか。（お金・財産・健康・社会的地位などの立場・家族・友人などの人間関係等、他）
- ・あなたが子どもの頃好きだった、あるいは印象に残っているおとぎ話、童話、物語は何ですか。
そのお話のどこが好きでしたか。
今、好きな物語などがありますか。それはどのようなものですか。
- ・現在の年齢をどのように受け止めていますか。
- ・自分の役割が50代の頃と変わりましたか。それについてどのように受け止めていますか。
- ・これまでのあなたの人生はあなたにとってどのようなものでしたか。
- ・若い頃と現在で「死」に対する考え方が変わりましたか。変化したとしたらどのように変わりましたか。

文献

- 青井利雄 2003 高齢者バウムテストの定量的評価についての基礎研究
仁愛大学紀要 第2巻 97-106
- 青木邦男他 2012 在宅高齢者の心理・精神的特性、その相互関連およびkobayashi 社会的行動特性との関連性 保健の化学 第54巻 第4号 279-285
- Bolander,K. (高橋頼子訳) 1999 樹木画によるパーソナリティ理解 ナカニシヤ出版
- 朴秋夢・浅川潔司他 2011 大学生の主観的幸福感と学校適応感の関係に関する中比較研究 学校教育学研究 第23巻 35-42
- Diener,E. 2000 Subjective well-being. The science of happiness and a proposal for a national index, American Psychologist
- 江花昭一 1999 ある女性の脚本と再決断 交流分析研究 24(1) 59-64
- 深澤道子 1999 再決断療法 交流分析研究 24(1) 18-25
- 深瀬裕子他 2010 老年期における心理社会的課題の特質：Erikson による精神分析的個体発達文化の図式第Ⅷだ段階の再検討 発達心理学研究 第21巻 第3号 266-277
- ドゥニーズ・ドゥ・カスティーラ 阿部恵一郎訳 2002 バウムテスト活用マニュアルー精神症状と問題行動の評価 混合出版 東京
- 橋本京子・子安増生 2011 楽観性とポジティブ志向及び主観的句副官の関連について パーソナリティ研究 19巻 3号 233-244
- 石井留美 1977 主観的幸福感研究の動向 コミュニティ心理学研究 1, 94-107
- イアン スチュアート, ヴァン・ジョインズ (深沢道子監訳) 1991 TA TODAY
- 最新・交流分析入門 実務教育出版 東京
- 伊藤裕子・相良順子他 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 第74巻 第3号 276-281
- 権藤恭之 2015 超高齢者の心理的特徴・幸福感に関する知見・健康長寿ネット
- 木下康仁 2009 質的研究と記述の厚みーM-GTA・事例・エスノグラフィー 弘文堂 東京
- 小林由美子他 2018 地域在宅高齢者における健康関連の逆境に対するレジリエンスの構成概念 老年社会科学 40巻 第1号 32-41
- Koch,C (林勝造・国吉政一・一谷彊訳) 1970 バウム・テストー樹木画による人格診断法ー日本文化科学社
- Koch,C (中島ナオミ・宮崎忠男訳) 2010 バウムテスト第3版 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究 誠信書房
- 金子学・原田邦彦 2011 健康心理学に基づく主観的幸福感指標と測定法開発の試み 心の健康生活・都市づくりに関する研究 41-55
- Larson,R. 1978 Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans

Journal of Gerontology 33 105-129

Maserati,M.S. 2015 The Tree-Drawing Test(Koch's Baum Test):A Useful Aid to Diagnose Cognitive Impairment Hindawi Publishing Comporation Behavioural Neurology Vol.2015 1-6

中村延江 2015 主観的幸福感と脚本分析 総合的健康美学研究 第5号 68-72

中村延江 2016 自立高齢者の心理的側面の調査—自覚的自己評価と無意識の自己像について 総合的健康美学研究 第6号 62-68

中村延江 2017 バウムテスト・キット 千葉テストセンター

中村延江 2018 高齢者のバウムテスト—大学生との比較— 総合的健康美学研究 第8巻 投稿中

無藤隆他 2004 質的心理学—創造的に「活用するコツ」 新曜社 東京・

森美保子 2008 自己対面法によるライフレビューが高齢者に与える影響

目白大学 心理学研究 第4号 85-99

リディア・フェルナンデス、阿部恵一郎訳 2006 樹木がアテストの読み方—性格理解と解釈 金剛出版 東京

中川威 2018 高齢期における主観的幸福感安定性の変化 老年社会科学第40巻の第1号 22-31

西田裕紀子 2000 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究 48 433-443

前田大作 1989 高齢者の主観的幸福感構造と要因 社会老年学 No30 3-16

大野裕・吉村公雄 2001 WHO SUBI 手引き 金子書房

Okun,M.A. & Stoc,W.A. 1987 Correlates and components of subjective well-being among the elderly Journal of Aplied Gerontology 6 95-112

P・バニスター他 五十嵐靖博他訳 2008 質的心理学研究法入門—フレキシビリィの視点 1-10,207-220 新曜社 東京

坂口守男・朝井均他 2005 地域在住高齢者のバウムテスト 大阪教育大学紀要 第Ⅲ部門 自然科学・応用科学 第53巻 第2号 83-93

坂口守男・朝井均他 2006 地域在住高齢者のバウムテスト (Ⅳ) ::非認知症群における年齢間の比較 大阪教育大学紀要 第Ⅲ部門 自然科学・応用科学 第55巻 第1号 115-125

Sell,H.&Napal,R. 1992 Assesment of subjective well-being inventory(SUBI). New Delhi. Regional Office for South-East Asia,World Health Organization

西條剛央 2008 ライブ講義 質的研究とは何か 新曜社 東京

佐藤秀紀他 1996 高齢者の主観的幸福感を規定する要因の検討 社会福祉学 37(2)11 1-15

Stewart,I. 1992 Eric Berne. London (日本交流分

- 析学会誌) 2015 エリック・バーンの交流分析 実業之日本社 東京
- Steiner,C, M 1966 Script and counterscript TAB5(18) 133-135 Steiner,C, M 1974 Script People Live ABantam Book Gropve Press,Inc
- 佐田彰見・芦原睦 1999 キャリアウーマンの脚本から脱し、不妊症も改善した身体表現性障害の1例 交流分析研究 24(1) 33-42
- 杉澤秀博 サクセスフルエイジングとは何か: 高齢者の生き方のモデル TASC MONTHLY 476 12-17
- 杉田峰康 1997 実践・交流分析(28) 脚本と決断 心身医療 第9巻 2号 71-76
- 柴田博 2002 サクセスフル・エイジングの条件 日本老年学会誌 39巻 2号 152-154
- 柴田博 2017 介護予防は複合プログラムで 第30回 日本老年学会シンポジウム 抄録
- 島井哲志・大竹恵子他 2004 日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale:SHS) の信頼性と妥当性の検討 日本公衆衛生誌 第51巻 第10号 845
- 新里里春 1999 脚本分析の基礎理論 交流分析研究 第24巻 1号 5-17
- 新里里春 1996 実践・交流分析(23) インテーク面接で脚本指令を特定する方法—禁止令診断技法 心身医療第8巻 9号 69-72
- 高橋雅春・高橋依子 1986 樹木画テスト 株式会社文教書院
- 戸ヶ崎幸子・坂野雄二 1993 オプティミストは健康か? 健康心理学研究 6(2), 1-11
- 豊田加奈子・松本恒之 2004 大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究 東洋大学人間科学総合研究紀要創刊号 38-54
- 谷口幸一 1979 パーソナリティに関する一発達的研究—高齢者のバウムテストの分析及び知的・情緒的変数との関連について 老年社会学 第11巻 ,32-48
- 山下真理子 1982 バウムテストの発達的研究—樹幹と幹の発達の傾向及び空間関係の描写について— 教育心理学研究 第30,巻 287-292
- 山下理恵子 2012 在宅高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼす要因について 日本健康医学会雑誌 第21巻第1号 144-145
- 山崎幸子 2005 高齢者の主観的幸福感に及ぼす社会関係の影響 人間科学研究 Vol.18,Supplement 46
- やまだようこ編 2007 質的心理学の方法—語りをきく—2-14,38-51,100-113 新曜社 東京
- 山岡昌之 1999 再養育療法 (Reparenting Therapy) から見た脚本 交流分析研究 24(1) 65-69
- 山本裕子他 2011 社会階級による高齢者の主観的幸福感の相違について —人生歴を通して— 藍野学院紀要 第25巻 7-17
- 渡辺裕子 1984 老人の主観的幸福感尺度の方法論的検討 季刊・社会保障研究 第20巻 第1号 81-91

謝辞

本研究を行い論文を作成するにあたり、調査やインタビューにご協力くださった方々に感謝申し上げます。特に、長時間にわたるインタビューにご協力くださった9名の方には深く御礼申し上げます。

さらに、審査の労をお取り下さった、主査の渡辺修一郎教授、副査の白澤政和教授、村上正人教授には論文作成中からご指導いただき、心より感謝申し上げます。

長田久雄教授には、研究を始める前からいろいろ相談に乗っていただきアドバイスもいただき、様々にご指導をいただき、何とか論文の形にすることができました。深く感謝申し上げます。

2018年9月

中村延江